

拠点づくりからの農山村再生

－田園回帰時代の新たな農村計画論－

(2019年度 都市農村共生研究ユニット研究セミナー記録)

2020年6月

和歌山大学 食農総合研究教育センター

拠点づくりからの農山村再生
— 田園回帰時代の新たな農村計画論 —

中塚 雅也

和歌山大学 食農総合研究教育センター

2020年6月

はじめに

食農総合研究所「都市農村共生研究ユニット」では、2019年11月7日に和歌山大学にて、本研究セミナーを開催した。今回は、神戸大学大学院農学研究科の中塚雅也准教授をお迎えし、『拠点づくりからの農山村再生－田園回帰時代の新たな農村計画論－』というテーマでご講演頂いた。中塚氏は、学生とともに大学と地域との連携活動に携わって来られた方であるが、私どもとの出会いはちょうど2年前の2017年10月19日にさかのぼる。本学より研究ユニット参加教員7名が篠山市を訪ね、神戸大学と篠山市との連携活動の現場を見学し、現地交流会を開催した。今回、2年越しの希望がかなって、本研究セミナーに中塚氏をお迎えすることができた。

当日は、大学の教員や学生のみならず、県内の行政職員、さらに拠点づくりや地域づくり活動、農山村再生に興味関心のある地域住民などが集い、講演後には活発な意見交換が行われた。

本セミナーの内容が、現場で「場」づくりに取り組む方々にとって、あるいはそのような大学と地域との連携事業に関心をもつ学生や研究者にとっても非常に参考になるのではないかとの考えから、講演と質疑応答の内容について、録音をもとに活字化し研究資料として発刊した。本資料が、地域での拠点づくり、学生と地域との場づくりなどに真摯に取り組まれている皆さまの今後の活動のご参考になれば大変幸いである。

最後に、大変ご多忙の折、研究ユニットの現地交流受け入れだけでなく、和歌山大学での講演や本資料の発刊を快くお引き受けいただいた中塚氏に厚く御礼申し上げたい。

2020年6月

和歌山大学 食農総合研究教育センター
特任助教 植田 淳子

目 次

拠点づくりからの農山村再生	-----	1
質疑応答	-----	15
付属資料	-----	27

拠点づくりからの農山村再生

－ 田園回帰時代の新たな農村計画論 －

神戸大学大学院農学研究科
食料共生システム学専攻
食料環境経済学講座
准教授 中塚 雅也

1. はじめに

本日のタイトルは「拠点づくりからの農山村再生」です。この「拠点」をメインにお話しするのは初めてのことで、今回の機会に合わせて、あらためて自分がやっていることを「拠点」ベースで捉え直してみようと考えました。「拠点を通して何をやっているか」、「このようなことをやっているのだ」といったところを聞いていただけたらと思います。

私は農業経済学、農業経営学を専門としています。農業経営のことも研究していて、それもどちらかというと交流型や家族農業経営です。大規模に集落営農をやっているとか、大規模化している経営のことはあまり研究対象にしていません。小さな農業や農家をどうやって維持していくのか、都市や消費者との中でどういう関係を持って経営も地域もよくしていくのか、ということの研究をしています。最近のテーマは、人材育成です。地域の移住・定住およびそこでの起業の促進。それについては農業に関わらず色々な仕事をする中で、「農村でどういう仕事を作っていくのか」ということを支援しています。あとは資源管理で、ため池を中心に取り組んでいます。最近は「ため池の資源管理を今後どうしていくのか」ということを行っています。

そういうことを実施する仕組みの中で「拠点」をどのように位置づけていくのか、自分自身どのように位置づけてきたのかということをお話しできればと思います。

2. 「拠点」に関心をもった理由

私が「拠点」に関心を持ったのは、3つの理由があります。1つ目が「経験的に」という話で、2つ目が「理論的に」という話、3つ目が「政策的に」という話になります。

(1) 「経験的な理由」

まず、1つ目の「経験的に」という理由ですが、自分が色々な場所に関わってきた経験

上、よい地域にはよいコミュニティがあるということを感じていましたし、そのよいコミュニティがある場所にはよい拠点があるということを経験的にみてきました。

「拠点」には色々なタイプがあり、公式な拠点もあれば、インフォーマルなものもあります。例えば祭りの話所もみたいなところも、1つの拠点だといえます。そういったインフォーマルな拠点から、行政等が作っている拠点まで色々あるのです。そして、よいコミュニティがあるところには、きちんと人が足場を置ける場所があるということを感じてきました。人も生き物も、生息しやすい場所や空間があって、(この辺、建築が専門の方々当たり前のようにやっていることだと思いますが)、そうした中で人を増やすには、生息しやすい場所を作ることから始めてもいいのではないかと思ったのが、1つの拠点に関心を持った大きな理由です。

人を増やすためには仕事を作らないといけないとかいろいろ言われるのですが、それより前に何となく気持ちのいい場所を作っていくことや、いいところにある場所を作っていくことが、回り回って最終的に人を増やすということにつながっていくのではないかと考えました。

若いころ造園コンサルタントのようなところで働いていました。ちょうど、小学校の中にビオトープを作ったり等、ビオトープ作りが流行していた頃です。生き物にとってのビオトープを作るのと同じように、人にとってのビオトープを作っていけば、地域コミュニティはよくなるし、人も増えてくるのではないかとすることをまず考えました。

(2)「理論的な理由」

次に2つ目の「理論的には」ということですが、「場」の理論というお話があります。経営学者の伊丹敬之先生という方が整理されたものです。2009年頃から、10年ぐらい前からずっと伊丹先生の研究をベースにしながら自分自身も研究していました。ここでいう「場」というのはハードの場ではありません。

書いていることを読みますと、『人々がそこに参加し、意識・無意識のうちに相互に観察し、コミュニケーションを行い、相互に理解し、相互に働きかけ合い、相互に心理的刺激をする、その状況の枠組みのことを「場」と呼びましょう』ということです。『拠点づくりからの農山村再生』という本で書かれているのはハードとしての「場」としての概念を向けましょうという話ですが、もともと私は「ハードの場ではなくてソフトの場が大事です」といつてきた方です。ソフトの方が大事だと10年ぐらいずっとやってきたのですが、「やはりハードが大事じゃないか」ということに、最近回帰しています。

結論からいうと両方大事で、それをどう組み合わせるのかということにつながっていくのです。

伊丹先生はソフトとしての場について整理されてきた方です。この「場」というのを「容

れ物」というふうに表現しています。「容れ物」の中で情動的・心理的相互作用が起これば、その中で共通理解、情報蓄積、心理的共振というようなものが起こっていった、「そこで新しい動きが出てくるのではないか」というようなことを整理されています。イメージとしてはバケツの中に物をいっぱい入れておけば、何となく発酵が進んだりとか、新しい動き、接合が生まれてそこから新しい活動だったり、ものが生まれたりとかがあるのではないかというイメージが「場」の理論です。

伊丹先生が組織の中や企業の中で行っていたこの理論を、私が地域づくりに当てはめたらどういうものかということ整理しました。地域づくりの手段ということで、こちらの図の左側に、例えば地域リーダー、行政、専門家の働きかけがあって、そういう働きかけがあったら住民の地域づくり行動とか、住民の学習があって、地域の持続的発展につながりますよってというような流れがあるとしたときに、その間に目にみえないもの、間のプロセスがあって、このプロセスをしっかりとデザインすることが大事ではないのかというようにアレンジしました。

そこで1つ、ここに「場」というのがあって、「場」をうまく設定すると、そこで住民の相互作用があって、意思決定とかエネルギーが高まって、それが地域づくり行動とか学習とかにつながり、その地域の発展になりますよという、このように整理してみました。

伊丹先生はそういう「場」をどうやって作るのかということ整理されていて、2段階に分けています。「場」が生まれる、生成されるというのを、「萌芽」と「成立」という、もう一つ細かく分けていて、一段階目を萌芽というように名付けて、それがきちんと確立する状況を、「場」が成立すると。

その上でその萌芽はそれぞれが設定するのか、外部が設定するのか、その人たちの創発に任せるのかということ、2段階それぞれ分けていて、その組み合わせで萌芽も設定されて成立も設定されるのが「設計される場」、萌芽が設定されて、成立が創発する場を「開花する場」、萌芽が創発され成立が設定するのが「育成される場」、萌芽・成立が創発する場を「自成する場」という形で、「場」のタイプをこういう4つに分けて確認、分類されていたのです。

これを私なりにアレンジしてみました。例えば地域運営組織（RMO）とか、地域の自治等、何かの活動を地域で生み出すときに、例えば「開花する場」の状態は、どういうものかということ、最初の段階とってください。最初の段階は、行政担当者が地域リーダーとかアドバイザーに働きかけて「場」の萌芽を設定して、その萌芽を、行政担当者や地域アドバイザーも入りながら成立に向かわせたら、次には、ここでいう設定するような、介入を極力少なくし、自発性に任せるという「場」の作り方があると思います。これまで篠山市で行ってきた地域運営組織の作り方がこういうやり方でした。篠山の例ですが、篠山市はこれを意識したわけではありません。篠山市がやってきたやり方を私なりに整理してい

うと、「最初は設定しましたが、あとは任せてきた」というやり方だったので、介入の度合いはある意味狭いもので、「地域にお任せしていた」ということになります。

地域運営組織の設立のプロセスが具体的にどのように行われてきたかということですが、例えば地区の一体感があって、周辺との潜在的な危機感があるような基礎条件がある中で、小さな活動事例があって、その上で地域リーダーが活動趣旨とか「場」を創出して呼びかけて、萌芽期を設定する。そういう萌芽期が設定された中で、幾つかの活動が実践され、拠点の整備がされていくと、ある次の段階で設立されるというような、こういう流れになるというのがうまくいった時の流れです。このやり方がいい、悪いという話ではありません。「場」というのはこういう形で 2 つに分けて成立すると、ちょっと詳しく設計されるのだという例です。この地区はうまくいったのですが、ある意味放ったらかしなので、地区によってはこの部分をもう少ししっかり設定しないと開花せずにこのまま枯れてしまうような「場」もあります。

また逆にここが強い設定だったばかりに、あまり自発性が生まれないというようなこともあります。何が大事かということ、地域の状況や、自分たちが関わっている関わり方をきちんとプロセスを解明していくと、どういう状況になっているのかというのが分かるようなフレームとして使えるのではないかということです。この「場」というのを 2 つの段階に分けて、もう 1 個のこういう場があり、相互作用的に意思決定等のエネルギーみたいのが起こり、行動が生まれているというように「場」が拠点になる「プロセス」を理解することにより、かつその「場」の設定を細かく分類することによって、起こっている現象をちゃんと理解し、それに対しての介入の仕方が正確というかきちんと考えられるのではないかというのが、この「場」の論理を地域づくりに取り込んだお話になります。

私はこれらのことを今まで実践して来ました。もちろんこのことばかりではないのですが、10年ほど、どうやって組織づくりをするのかということ「場」との関係性で行って来ました。先ほども述べましたが、基本的にハードは関係なく、ソフトの議論となります。ソフトの議論をずっと展開する中で、何となくやはり拠点、ハードとしての拠点がものすごく大事ではないかと思ったというのが、本日の話に繋がっていきます。

(3)「政策面からの理由」

そして最後 3 つ目に「政策的には」という話です。先の 2 つのかなり後になるのですが、政策の中でこういう拠点が大事だという話も出てきました。

国土形成計画の中で、「コンパクト」と「ネットワーク」ということが概念として目指すべき国土像として着目され、その中で「小さな拠点というのは大事ですよ」といわれてきました。

「コンパクトなネットワーク」とは何かというと、「コンパクトにまとまった各地域を

つなぎ、利便性を向上させて圏域人口を拡大し、地域が連携して役割分担していきましょ
う」ということです。バラバラだったものをある程度つなげ、そこをつなげることによっ
て災害対応とか、他所ともつながりながら観光対応や医療対応、レジデンスの向上みたい
につなげていきたいと思いますというような話が、国土計画として行われています。

その中で一つ、農山村に関係する大きな言葉として、「小さな拠点」という言葉がある
のですが、それは基本的にハードとしての拠点のことです。何かというと、小学校区など、
複数の集落が散在する地域において、商店、診療所など、日常生活に不可欠な施設・機能や
地域活動を行う場所を、歩いて動ける範囲に集め、周辺集落とコミュニティーバス等の交通
ネットワークで結ぶことで、人々が集い、交流する機会が広がっていく、集落地域の再生を
目指す取り組みのことを小さな拠点づくりといたしましよというこで、2009年ぐらいか
ら国の方で議論してきた動きです。

イメージ的には、どこの村にもある銀行とか ATM とか、旧小学校などを拠点として位
置付け、バラバラとあって難しいように思うのですが、拠点とするならば、ある程度集約
し、それぞれの機能補完等をするこことによってそれぞれの機能を維持しようというよ
うな取り組みです。

何をするかというと、「小さな拠点」の役割としては、暮らしを守るということでの生
活の拠り所の部分と、未来への展望を開く定住の砦という攻めの、両方セットで位置付け
し、住民、その拠点の規模として住民の見守り等、目配りの拠点、生活サービスのワン
ストップの拠点、いざという時に地域を守る防災拠点というような部分と、外部との交流と
か雇用とか、外とのゲートウェイとか、小さくてもいいから機能を持ちましようとい
うこで議論されてきました。国土交通省が出してきた当初のプランは、私からすると、す
ごく大きな道の駅を、「小さな拠点」として捉えていたのですが、そうではなく、もっと分散
的に既存のものをきちんと相互に結びつけるような形で拠点機能を持たせ、維持してい
こうというように、基本的な考えを書いています。

「小さな拠点」のポイントですが、小さいからこそ大事にしましようということになり
ます。近い場所に作れて、機能を組み合わせて、かつ自分たちで作ることができ、次の資
源に生かせると、規模の経済でなかなか維持できないものを、範囲の経済できちんと維持
してしましようということ。役割をつなぐ個別の、また採算の合わない生活サー
ビスをまとめて相乗効果で利用拡大すること。空間をつなぎ、点在する生活サービスを徒歩
で動ける範囲で組み合わせること。配達の帰りに農作物を集荷するなど、時間をつなぎ、う
まく使って、異なる活動を合わせ技で行う、というようなこで「小さな拠点」を作
りましよう、という動きも広がっています。

広がっているというのは、国としてきちんと作ってしましようといっているのですが、
なかなかどうして、地域の中での小さな拠点、「小さな拠点」を作るという事業が、単独の

メニューとして政策が上がってないこともあり、これが「小さな拠点」ですということ、いわれていない、広がっていないという状況です。

何よりも「小さな拠点」という言葉が難しく住民には理解されづらい状況です。特に現場では地区内の集約化のイメージと重なってしまい、議論が進んでいません。実際に、集落内の拠点を作るということは、その周りのところは「辺境地」になるのかと、「周辺地」になるのかという議論になりがちで、住民への理解を得ながら事業を進めるということが難しい状況です。結果としてうまく、各村に拠点ができ、そのネットワークが図れれば良いと思うので、政策レベルでうまく作ってあげれば良いのですが、課題も多い状況です。

当時の大臣も、「コンパクトシティ」の話と「小さな拠点」の話を混在して説明され、混乱を来し出だしをくじかれたという説もありますが、大事なのは、小さな拠点づくりという話は、ネットワークづくりだということです。

集約するというよりは、拠点があってそこから手足を伸ばしているような感じのものを作っていくというのが大事だと、我々は議論してきました。

当時の小さな拠点の議論をした際に、高知県土佐山地区で上がっていたので、ちょっと参考までに説明します。例えばいくつかの集落のまとまりがあり、それぞれに拠点を作りながらこの地区全体としてはここが小さな拠点というのは、それぞれのまとまりの中で拠点をもちながら、全体の中で一つの、また別の拠点を作ということです。こういうネットワークを築きながら、この地区全体の生活を守るというか、よい町を作ることができないのかということを議論してきましたし、伝えています。

(4)「小さな拠点」に必要な人材育成

ここからは私が補足した部分です。2013年ぐらいに、国交省関係の機関紙にも書いたのですが、小さな拠点というのは、生活を守るとか、外との交流の拠点というだけでなく、しっかりと「人材育成機能」を持たないといけないということを指摘しました。

ハードとしての小さな拠点の上に、これは場としての拠点ですね。空間と時間をつなぐプラットフォームみたいなものをきちんと作って、そこが学習の機会になり、そこで人材育成とか、実践活動グループの育成を行い、また課題解決を行うような。プラットフォームが、学習の機会を充実させる仕組みになった方がいいのではないかと提案してもらいました。実際、農山村の中では、場所によって公民館とかがこういう活動を担い、(地域によって温度差がかなり違うのですが)、こういう学習機会があって人材育成をしっかりとしていてというところもあります。今後公民館をどうするのかということは、島根県なんかでも議論されていますし、後で紹介する例も元々は公民館活動から始まったのですが、公民館だけでは前に進まないの、じゃあ何をしようということでもまた新たな拠点

を作ったという例も後で紹介したいと思います。

時間軸や空間軸をきちんとつなぐようなものが拠点には求められるのではないかと思います。以上、私が拠点について、なぜ関心を抱き、どうみてきたのかということ、少し紹介させていただきました。

3. 「小さな拠点」の具体的事例

ここからは具体的な事例を話していきます。

改めて「場」をつくるということ、「拠点」と読み替えてもらってもいいのですが、物理的な場所と仕組み・機会があるというふうに2つちゃんとあると理解しましょうというのが場です。ただ、双方の場が失われてきているというのは事実だと思いますし、多くの場で起こっていることだと思います。特に物理的な場としては、フォーマル、インフォーマルとがあるのですが、例えばインフォーマルに、昔は町の八百屋さんがその人々のコミュニケーションの場であったり、酒屋さんがその場所だったりなど、そういうのも含めてハードの場なのですが、そういう場所がなくなっています。地域の飲み屋さんとか農村部の飲み屋とか食べ物屋がなくなっていくと、人々が拠り所にする場がなくなっているという現状があります。また一方で、行政とかが作ったような場所が、あまり使われていないケースだとか、使っていたとしても一部の人たちが使っているだけで、幅広い人たちにとっては使い勝手が悪いというようなことも起こっているということをよく目にします。多分皆さんもよくご存じのことかと思えます。

現状をしっかりと見直し、場を再設計・再設置するということが大切で、そうした中で、集落の内と外とか、空間とか時間とか資源をその場がしっかりとつなげることが、もう一度つなぎ直すことができないのかというのが、場を作ることかと思えます。

(1) 事例紹介① 『さんばやひぐち』の例

今から事例を幾つかお話ししますが、一つはオーソドックスな場づくりでうまくいっている例です。

2010年に、空き家になっている、『さんばやひぐち』（かつて産婆屋をやっていた樋口さんの屋号をそのまま使用）を、住民主体で改修しました。今時は珍しくない取組みですが、2010年ぐらいには先進的な取り組みのひとつでした。それをみんなで行ったということです。

丹波篠山市福住地区では、2014年に「福住地区まちづくり計画」を策定し活動しております。移住が進み、新しい店舗も増えていますが、2016年に小学校が閉校してしまい、今は、この小学校を新たな拠点として、地域づくりを進めていこうとしている地区です。

まず、まちづくり計画を作成しました。厚い計画書ではなく、こんなことをやりたいという希望を含み作っていった計画なのですが、地区の子供達も来てもらったりだとかしながら、計画づくりをしていたというのが、拠点づくりの第一歩でした。拠点があったからこそ、こういうことができたと思います。ちなみにこの地区内には市役所の支所があったので、民間とは別にもう一個、フォーマルな拠点があったのですが、そこでは行わずにこちらでやっていました。公的な場所を使用すると、大体、飲食禁止、夜間使用禁止といわれてしまうのですが、空き家の拠点では、みんなお菓子を食べながらリラックスした雰囲気活動していました。

話は飛びますが、小学校の跡地は、この写真のようになっています。2010年に「さんばやひぐち」を改装しているのですが、古民家改修が連続的に起こり、いろんな話が進んでいて、小学校の改修とかが上がってきて、その後このブリュワリーみたいなものの改修があるので、もうちょっと先に進んでいます。

ちょっとした図なのですが、最初にさんばやひぐちがあって、それが次の拠点づくりとかにどんどん繋がっていくというような、最初は何かわからなかったけれども、さんばやひぐちが一つのシンボルとなって、住民の意識がだんだん広がっていきながら、関わる人たちも拡大しながら、拠点がどんどん広がっていったというようなそんなイメージ図です。

最初に、ポツンと一個拠点を放るといえるか、旗を一つ立てることによって、その旗の周りに順番に活動が広がっていくというような例です。この写真が1番新しいですね、9月ぐらいにオープンしたところですかね。いろんな主体があり、いろんな関わり方で、いろんな人たちが入ってきて、進んで行っています。

以上、この例は一つの正当的な地域づくりの流れですけれども、もう一つの拠点という意味で、改めて考えると、大学で拠点を作ってきた部分は大きな意味があると思います、今日は紹介したいと思います。

(2) 事例紹介②『神戸大学 篠山フィールドステーション』の例

篠山市と神戸大学の取り組みとして2006年にフィールドステーション、2016年に農村イノベーションラボという、二つの拠点を篠山に作りました。

2006年に社会福祉協議会が入っていた建物を借りて、神戸大学の篠山フィールドステーションという名前で拠点を作って、ここでの拠点をベースにしながら学習プログラムといって月に一回農家さんのところに出向いたり、現場でいろんな体験をしながら課題解決をしていくプログラムとか、これと和歌山大学さんも色々やってはると思いますけれど、そういう取り組みをその拠点をベースにしながら、という例です。

実は、これは全く予期していなかったことなので、創発的な設計をしていなかったことなのですが、大学の1年時に、月に一回学生が行くと、そこで学生が学生団体を作って、勝

手に活動するようになったのです。設立当初の、「篠山ファンクラブ」という団体の学生達が偉いと思うのですが、学生達がこういう活動をしたことをきっかけに、何となく、そこに行く活動グループを残って作らないといけないのではないかというような空気が生まれ、(たまにできないこともあるのですが)、こういう形がどんどん場所を変えながら設立し、実践して行き、そこを拠点としてベースにして活動するような学生団体が生まれて行くということがありました。学生のことなので、大学側として、継続や解散など何もいわないので、卒業とともに終了する団体もあるし、サークルとして新しい1年生をずっと入れていく団体もあり、そういうのは自由にやっています。

神戸大学の中に、「にしき恋」という大きなサークルがあり、この団体だけがずっと新入生を獲得して行き、今では、140人ぐらいの学生が団体になっています。先日、農水省の賞をもらったみたいですが、2013年からなのでもう6年ぐらいずっと活動をしている団体もあります。

細かいことをいうと、これらの活動でも、うまくいっているところはどこかというところ、結局ここには、学生達がベースにしている拠点を、ちゃんと地元が与えているところなんです。

もちろんサポートの差もあるのですが、そこに行けば「部室」みたいなものを、ちゃんと地元が与えてあげているということは、学生たちが定着しやすいです。

その一方で、これまでの話は学生の教育なのですが、もう一方として社会人教育と一般の人向けに、起業とかを促進する仕組みを作ろうということで、地方創生の事業を使って、篠山口駅にもう一つ拠点を作りました。何とかしたいということなので何かしようかという話になり、実際、二つも篠山に拠点はいらないのですが、結果的に、現在大学で、2カ所篠山市内に拠点を持っています。

篠山口駅という一等地に、「特産物展示コーナー」というあまり人が訪れず、使われていない部屋があったのですが、市の方と交渉し、改装した後、現在のような見栄えのする場所に生まれ変わりました。よい場所がずっと使われておらず死んでいたのが気になっていたのです。

駅中にこういう拠点があると、何かやっているのが、駅を通る人たちも見えますし、社会人や一般市民の方とつながることができます。

例えば、篠山で地域おこし協力隊。大学での活動プログラムがあったのですが、地域おこし協力隊という制度を踏まえながら、学生でも地域おこし協力隊になれるような制度も作り、社会人や一般人向けにイノベータースクールという形で企業とのプログラムを作っています。それを「フィールドステーション」と「農村イノベーションラボ」という二つの拠点をベースにしながらやっています。

今まで88人がイノベータースクールで受けて、事業規模は小さいのですが、2割が起業

しています。それでも 11 名が篠山市に移住し、20 名が篠山市で起業しています。すごい割合だと思います。

実際、市外での起業もあるのですが、一応市内だけだったら 13 の起業がありました。また起業とは別ですが、隣に無人駅があったので何かやりましょうといったプロジェクトも始めています。3 年ぐらいやっていると何か出来てきます。最終的にさきほど話した学生たちもちょうどこの前、マルシェみたいなイベントを開催しました。

篠山で目指している仕組みというのは、繰り返しになりますが、二つも拠点があるので「どう位置づけるか」ということです。シェアオフィスやコアワーキングで、人がこう入ってきて、ここで滞留していてもしょうがないので、最後にちゃんと地域の周辺部含めてですね、地域の中にちゃんと落とし込めるようなそういうラインまでちゃんと作りましょうということをいっていました。このラボつながりで、地方創生のお金の時に、これは「地域ラボ」と名付け、政策にしましょうねという話をし、地域の中にも拠点を作って、その地域ラボが「小さな拠点」というのと同じ機能を持たすような形で位置づけた。「小さな拠点整備事業」という名称ではないですが、地域ラボ整備するというので「小さな拠点」を作っていこうとやっています。全部がそんなにうまくはいかない上に、こういう流れの中でフィールドステーションを飛ばしながらの場合もあるのですが、ここにいくことを目指しています。拠点をうまくハシゴしていく形を目指していることを行っています。

また元々、篠山市で行っていた事業を、神戸市でもうちでもやりたいというような形で、声をかけてもらい、神戸市でも今年から「人材育成神戸農村スタートアッププログラム」という名前の事業もやっています。実際、補助金等も少額ですし、今後の見通しが立たなかったもので、拠点づくりはしていません。ただ、神戸電鉄の谷上という駅にあるコアワーキングスペースや、神戸市内と関わりのある拠点や農村部での地域づくりの拠点みたいなところを、このプログラムの拠点として位置づけて活動を行っています。

(3) 事例紹介③『神戸大学 東播磨フィールドステーション』の例

同様のことを兵庫県東播磨地域でも行っています。ため池のことなどに関心が高く、何とかしたいのだけど、東播磨地域はため池協議会とかを作って、住民参加のため池管理などを先進的に進めていたのですが、この先につちもさっちもいれないことが予想されるということで、何かできないのという話の中でとりあえず拠点を作りましょうと、この場合は 3 大学で拠点を作りました。

東播磨フィールドステーションというものを設置しました。場所があるといろんな取り組みが出てきて、大学レベルでちょうど今、九州大学とかイギリスの大学とか、このような拠点めがけて何かやっているということで来てもらっています。

もちろん地元の方々との取り組みもいろいろ行っています。元々お好み焼き屋さんだっ

たところを借り、県の方々と一緒に、自分たちで直して拠点が出来上がりました。県のお金も使い、少しずつ整備し、小綺麗な拠点に生まれ変わっています。

(4) 事例紹介④『島根県真砂地区と奈良県東吉野村の取り組み』の例

4つの目の事例紹介の一つは、島根県真砂地区の取り組みです。

さっきも申しましたが公民館が中心となってかなり先進的な取り組みをしていたのですが、世代交代とか活動の停滞を打破したいということが課題でした。そうした状況の中で若者が中心となってもう一つの拠点を作ることが行われた事例です。

またもう一つが、奈良県東吉野村の事例です。人がいないということは、外部人材も課題ですが、地元の調整だけで疲れてしまう現状の中で、それならいっそのこと外部人材が中心となった拠点を作ってしまったという話です。この二つを紹介したいと思います。

島根県の事例の具体的な拠点としての場所は、昔のJAの建物です。購買の場所だったようです。ここはまだJAが使用しているのですが、もうほとんど機能が無くなり、一週間に一回だけ、JAから人がやってきて、手続きだけ行うというそんな使い方をしていません。この事例は、公民館という立派な活動拠点があるのですが、空き店舗を改修して、ある意味、居酒屋的なみんなの拠り所として、カフェとか居酒屋とかの活動ができる場所として作り直したという話です。移住した人たちがちょっとしたメニューを作ったり、日によっては若者が集まるようなことをやったりとか、そんな拠点づくりをしている例です。

奈良県の事例の場合、普通の家を改修、しかもお金をかけて格好良く改修しているのですが、移住者が完全に運営も行い、この場所が一つのゲートウェイになっている事例です。拠点が、地域のシンボルであり、移住のシンボルであり入り口にもなって、ここに来ればなんか次の新しい人に会えて情報が得られるのではないかとの気持ちを抱かせ、この拠点に移住者がどんどん入ってきているということが、行われている場所です。

真砂地区の場合は、元々フォーマル-インフォーマルがあって、交流型でフォーマルな活動をしていた公民館活動があったのですが、高齢者が中心で後継者が業務的だったということで、もうちょっと事業活動に取り組んだのですね。公民館として、事業活動をしていくというこの取り組みだけでもすごいことなのですが、それでもやはり高齢者が中心となっていたということで、もう少しインフォーマルな場を作ることはできないかということ、この中の若い人たちが言い始めました。幸い館長さんもそのような理解があり、「てれいぐれえ」というさきほどの場所の名前なのですが、JAの跡地の場所を使って作りました。交流の場所ではないのですが、交流の場所ができることによって、そこを起点に何か新しい事業系というか課題解決系の取り組みも出てきますし、ここをベースにもう1回公民館活動に入る人たちも出てきたというような、こういう動きが出てきたというような例です。

また、もう一つ別の事例、奈良県の東吉野の例です。若干軸が違うので一緒に並べるとよくないかもしれませんが、地元と外部者みたいな話があった際に、地元で自治活動とか各種事業やっていたのですが、これも同じように後継者難になっていたので、ここにどれだけ人を入れるよう言ってみても、なかなかうまく入り込めないということでした。

ここには自治会とか自治交流館みたいなところもあるのですが、全く違う外部者専門の仕事とか課題解決とか専門の場所を作ることによって、ここに若い人たちが入ってくるという新たな動きが出てきたと。そして、そこで収まっているかということ、ここに来た若い人たちは実際に、きちんと場所を作ってあげば、こういう活動にちょっとずつ入り込んでいって、従来の活動にも動きが出てきます。場所をきちんと作るというのは、空間的な場所、建築の方の世界だと思いますけど、空間的な場所を然るべき場所に設定してあげば、つまり人目につかない場所等ではなく、ちゃんと集落の中での距離感を図れるような場所に作ってあげば、こういう活動とのリンクもできてくるということです。

このような場を、集落のどこに作るかという話はすごく大事な点です。

拠点作りから始めるということで、そういうことで私としてはハードとしての拠点到再注目していて、拠点を動かすことによって組織や流れを変えられると考えています。昔の都を移すとかもそうなのでしょうけど、拠点をちょっと移すと、流れや組織を変えられるし、その上拠点があると、シンボルとして何かをやっているものなのだと、外の人からわかります。またキャパシティがみえるということは大事なことですし、後は簡単に辞められないということもあります。

良いか悪いかは別として、行政が関わる東播磨のような取り組みについても、何度も確認します。本当にやるのですか、一度始めたら簡単に辞められないですよ、と。

拠点を作ってしまうとなかなか止めづらいのが現実です。

ハードを作ると、ある意味、活動の担保にできるという人質みたいなものになってしまうので、関わっている人たちがそれを何とかしていこうと思うのであれば作ってあげばいいし、逃げようと思う気持ちがあれば作ることは駄目だと思いますし、そのような機能があるかと思います。

4. 拠点を作る際に重要なこと

ハードとしての拠点を作るというポイントを自分なりにまとめると、「ずらす」とか「自分たちでそれを作らないといけない」とか、「かっこよくないといけないだろう（見た目）」なども、結構大事なことです。後はそれを繋げる人が必要ですよということです。あと先ほどの「場」の理論の話と関連しますが、作ることとそれらをきちんと成立して継続するためにというのは、話が異なります。継続するために何が大事かって言うと、結構「開

けておく」ということが大事になります。開けていくためにはすごくエネルギーが必要となるのですが、どうやって開けるかっていうのをしっかり考えながら、その拠点をちゃんと開けるといのが、一つ目の課題です。

二つ目の課題は、自由度と中立性を保つという点です。これもどちらかに寄ってしまったり、何かに寄りかかかってしまうと、制限があるとなかなか発展しないというのと、常に新しいことをやらないといけないということが、ハードとしての拠点を作る際に大事だと思っています。

拠点作りはハードとソフトが両方必要という点と、介入方法、またそのためには環境整備が必要で、どうやって介入するか、どういう環境を作るのかという点が重要だと思います。

最後に、最初の話に戻りエコシステムの構築の話です。生き物の話になりますが、生き物にとって育ちやすい環境があるように、人間にとっても育ちやすい環境があると思います。新しい取り組みやアイデアも、エコシステムから生まれるということです。イメージとして、種が飛んできた時に育つ土壌作りが必要で、ビオトープ作りというのがほとんど拠点作りになります。その延長に、エコシステム作りというのが大事だろうと考えています。

拠点があればいいだけの話ではなく、拠点というのがひとつあって、そこに仕事上では、オフィス、ネット環境とかオフィス環境とかがあって、コーディネーターがいる必要があるのですが、そこをベースにしながらこういう関係性をエコシステムとして構築していくことが大事だと考えます。

(1)つなげていくために必要な変化

「ずらす・繋げる」と中間組織・人の役割ということで、継続していくならばたぶん変化が必要なのだろうと思います。既存のままじゃ廃れていくという状態とか、うまくいかないという状態に出くわすならば、少しずつしたり、今と違うところに場所を作ったりとか、グループを作ったりとか絶対しないと駄目で。今のところにどれだけ輸血しても流れていくだけです、本当に無駄だと思います。そんな既存の構造、ネットワーク、関係性などを少しずつして、そしてずらした上でバサッと切ってしまうのではなくて、ずらした上で既存の仕組みとどうつなげるかというのを考えていくというプロセスが大事なかなと思います。

例えば新しい拠点作りや、若者だけや女性だけの会議にしてしまうなどの方法があります。これは何度もやっていますごく難しいのですが、絶対に出てきます。若者だけでやりますといってるのに、絶対に覗きに來る人が出てくる。少しだけって言って永遠に座り続けることが。女性の方だけって言っても、なかなか出ていってくれなかったりですとか、結構難しい。もちろんその逆もあります。年配の方だけの会とかあると思いますが。定住

とか就労についても、子ども子どもといってるから難しいのかもしれませんが。よく言われるように、一世代飛ばして孫と組むと案外いい距離感が生まれ、案外スムーズに行くということもあることを最近よくみます。農業は子どもより孫への継承の方がいいのではないかと気がしますが、有用な資産だけをうまく受け継ぎながら、程よい距離感を。親子が喧嘩するという話です。そういうのを含めてずらすとかその上で繋げるというのが大事かなと思っています。

(2) 第三者の役割

「セットアップ」というのは、そうしたずらす時に第三者がうまく入って行ってあげると、兵庫県立大学の内平隆之先生とよく話をしているのですが、それを自分たちでやるのはなかなか難しいので、誰か第三者がそういう間に入るということも大事だろうと。そこで中間的な役割を果たす組織や人の機能が求められると思います。その点、大学関係者とか学生などはそういう意味で中立的な立場に立ちやすい人です。行政はやはり難しかったですし、だからそういう人たち、都市住民や外部の NPO だったりとか、そういう人たちが間に入ることによって、うまくずらすとか繋げるというか、形を変えることができるのではないかなという風に思いました。

以上、拠点作りからの農山村再生というテーマでお話をさせていただきました。

質疑応答

○辻和良（座長：食農総合研究所 都市農村共生研究ユニットリーダー）

有難うございました。続けて、質疑応答・意見交換を行っていきたいと思います。ご質問がある方は所属とお名前をいってから質問やご意見をお願いします。

いろんな話が出たので、なかなか盛り沢山だったと思うのですが、それとその場に行っていないとは分からないような話もあったかと思います。

1. 拠点の改修の費用について

○辻（座長）

一つお尋ねしたいのですが。こういう拠点を今まで改修とか色々されていますよね。場を作るということで、その費用というのは、どこが負担しているのですか。

○中塚雅也氏（講演者：神戸大学大学院 農学研究科准教授）

大学の場合は、大学が出すことはなかったです。行政の方の補助金など、もらいながら改修しています。ただ地元の拠点は色々な形があります。篠山の場合は、民間でも動いています。民間のお金で動かしていたりもしますが、全体的には補助金が多いですね。

2. 地域リーダーについて

○Aさん（質問者）

高野町から来ています。場作りのところで地域リーダーを設定してというお話をして頂いていたのですが、高野町の地域だと、区長さんが毎年変わるので、区長さんとかにというのは、なかなかしんどいことがあったりするのかなと思います。そういったところで地域リーダーっていう存在の掘り起こしというか、既存の活動があるのであれば、その方という話も出来るのでしょうか、そういうのがほとんどないような地域でしたら、その場合、どういう風に掘り起こしていくのが望ましいとか、こういう人材が望ましいとか、そういったアドバイスがいただけると大変参考になります。

○中塚氏（講演者）

難しいですね。先ほど私は、人材育成という話をしましたが、人材は基本的に「育成」できないと思っています。

たくさん人がいるので、まず光を当てて「登用」する方が、早いというかそうあるべきだと思います。ただ、登用する時に今日の話の「場」でいう時に、既存の「場」に登用す

ると潰れちゃうパターンがあるので、違う場を設定してそっちで登用しましょうよという話になります。なんでもかんでも既存の場に入ってきてもらって、リーダーになってもらおうとすると、そこに乗れる人はいいのですが、そこに乗れない人たちは、そこには入れないことになります。

極端な例ですけど、20歳の女の子が60歳の人たちがいっぱいいる場にてリーダーになるわけがないのですよね。それであれば、別のところに20歳の女の子達の場を作ってあげて、そこでリーダーになってもらえれば、それはそれで動くと思います。

大体、行政の政策とあって、「みんなで一緒にその場を」と言ってしまうのですが、そうではなくて「違う場の方が絶対に良い」と思いますし、一緒にして互いにいいことはあまりないので、別の場所にその人達の詰所を作ってただちよつとずつ、なんとなくやっていることが見える距離感で、その場を作るのが大事かと思います。

3. ため池管理と大学連携について

○Bさん（質問者）

和歌山の6次産業化の支援センターのものなのですが、大学連携による拠点作りの中で、東播磨地区のため池管理の方針に関する相談があったということで、これについてはどんな形があったのですか。話の中であるいは大学の名前がたくさん出てくるのですが、ため池なんていうのはどっちかといったら、受益者が行うものであって、大学が入って何かを行うというのは、いまいち想像がつかない。どんな活動をしたのか教えていただきたい。

○中塚氏（講演者）

兵庫県では、受益者以外の農家さんも入ったり市民も入ったりしながら、ため池を管理しようという動きを10年ぐらい前からずっと行ってきました。先進的に「ため池協議会」という名称で小学校の生徒さんや都市の方も入りながら行ってきたのですが、ただそれをやってきたけども、解決しない問題が色々出てきそうだと、いう風に、県の担当者の方が思われていて。今までこれが正しいと思ってやってきたけどもこのまま進んでいったらダメけどもどうしよう？と、そういう相談を受けたのですね。

ですので、どういうシステムをどういう形で今後のため池管理をしていけばいいのかを、一緒に考えて欲しいという相談に基づいて活動を行っています。

今まで言われてきた住民参加ってどこが悪かったのだとかどこに届いてないとかって、あまり整理もされていなくて、とりあえず住民参加はいいことだという風にいわれてやってきた。例えば水入れ作業とかには本当は「住民参加」は難しいし、必要ないかもしれない。現状、結果的に、クリーンキャンペーンの参加者は増えたが、水入れ作業の後継者が

いない。では水入れ作業は難しい作業かといえば、結構誰にでもできる作業です。そうした作業スキルは、従来より少し範囲を拡げた「住民」にはちゃんと伝えて、担い手を増やす。ただお金の管理とかこの部分は従来からの地元住民でちゃんと回しましょう、とかいう役割と機能を、順番に整理して行っています。受益者が減っていく中、実際水は余っていますし、昔と違って水が余っている中で、みんなの公共財としてため池をどうやって管理して行こうかと、その仕組みづくりを考えているところです。難しいですが。

○Bさん（質問者）

いわゆる第三者であったり、農地中間管理機構的に農地を地域会の人で作ると。そうだった時のため池の存続云々については、地域内の人がため池を管理してくれたらいい。水利の関係はするよと、耕作者が本当言うたら、水利権と言うか、払わないといけないけれども、逆に和歌山市であれば、和歌山市の池があるのに、那賀郡の人いわゆる那賀とかちよっと離れた人が来ると、その人のところへ金銭の徴収もできないということで、旧地主のところへ行かないかとか。私らもいろんなことに困っているのです。それを誰がするのということになってきたら、今残された水利組合のものがせんと仕方がないし、それを行政に持って行っても、無理やでと。逆にその池が崩壊して、もし下で危害が及ぶとなってきたら災害で直してくれといっているけども、水利って言ったらどっちかといえば受益者が負担するものであるから国は直せない。被害が及ぶようであれば、国としてはいわゆる災害復旧として直すけれどもという形で、そこらを大学は上手に組み立てるとか、そんなことをやっているのでしょうか。

○中塚氏（講演者）

そのような問題を整理していきますが、その整理の際のお手伝いをしています。今後どうやっていけば、ということは、まさに今困っているとおっしゃったことと同じように困っているので、今後管理する人がいなくなり、受益者自体がいなくなっていく中で、じゃあ次どうするのというのを、今ため池管理者の人達と話をしながら、一個ずつ解決の方法を探しているということの手伝いをしています。

○Bさん（質問者）

ありがとうございます。

4. 地域の再生に必要な視点とは

○Cさん（質問者）

私自身の田舎は、和歌山県の高野町の紀の川沿い、旧清水町の空き家で、それこそ私も歳とり、今和歌山市に住んでいるので田舎の家を処分しようかと話しているのです。私も先ほど先生のお話に出たようなところに、全国各地個人的にいろいろ行ったことがあるのですが、大概さっき話のあったリーダーというのが、「育成」というよりも、そこに生まれ育った立派な人たちが自然発生的に活動している状況を目にします。専門家に話すとリーダー一人では何にもできませんよと、3人いれば、大体2人から3人いれば、拠点にして活動を行ったりしています。

あるいはよくご存知だと思いますが、徳島県の神山町はIT関係で有名ですが、活躍している人材はよそもんやと、地域はそこをうまく活用して受け入れた人たちがそのの住民にいるというような事例があります。

組織や場は大事ですが、最終的に、そこで育った人たちがいかに自分たちの限界集落、過疎地域を何とかしていかになくちゃいけないと思うことが一番大事かなと。つくづく県下の事例や成功している事例をみると、必ずそこには素晴らしい人がいるということで、おそらくそのひとつの中には、先生方という外からの支援者もあったと思うのですが、生まれ育った人がやっぱり地域の再生には大事かなと思うのです。質問というよりもそういう思いを持っていますという感想です。

○中塚氏（講演者）

そうです。もちろん地元の方々が大事だし、協力が無いといろんなことができないですが、メッセージとしてはリーダー待望論って、リーダーがい無いと何もできないという議論はずっとあるのですが、人を連れてくるという前に、人が住みやすい場所をつくりませんかという、すごくシンプルなメッセージなのですよ。良い空間、良い場所を作っておけば、飛んでくることもあるのではないのか、埋もれている人たちがそこにぎゅっと上がってくることがあるのではないの、とそういうお話です。

○Cさん（質問者）

ありがとうございます。一つだけいうの忘れていましたが、最近、朝日新聞に掲載されていた記事で、林業関係だったと思うのだけでも、その人がよそから来て、こんなもんがうちの町に村に、宝があるかというのを発見した。それに気付いた移住してきた人は偉い人やと思うのですが、それに地元の人たちも気づき、波及的に今は発展して、地域の再生作りをしているという記事が掲載されていました。そういうよそもんが来て、よそもんを受け入れるだけの地域の住民の心が、何て言うかな、それを見つけて自分も協力するということがこれからの集落が生き残るために必要かなと。そういうことを先生方がアドバイスして頂ければありがたいなと思います。

5. イベント等の継承の在り方

○Dさん（質問者）

和歌山県の過疎の集落にある私立の学校、りら創造芸術高等学校で教員をしています。今日はありがとうございます。非常に参考になりました。

本校ではですね、過疎の集落で人口が減って行って、子供達がいなくなって休校になった小学校を活用し、芸術をキーとする高等学校ということで、14年前に専修学校というスタイルで開校しました。今、高等学校化をしまして、運営しているのですが、その中で地元の方と世界をテーマにしたお祭りをしようと、目標にしまして本当に数百人しかいない地元の方のリーダーと呼べる方を数人出てきていただいて、ずっと10年近くですね、お祭りを開催しています。

その中で実は、先ほどのお話で地域づくりは育成よりも登用お話を伺ってすごく共感をしまして、僕らもうどちらかと言うとこの場所で何かをしたいということで、育成よりも登用できています。ただその中で作る過程の中で、どんどん育成されていっているとは感じるのですが、育成しようと思って育成するものでもないのかなというところは、すごく頷けました。

今10年超える中で、世代交代というものが必要だろうなということを感じています。やる気がなくなったわけではないのですが、さらに10年、20年続ける中で、世代交代をしたいとの意見が強く、内外から発生しています。

その中で世代の交代のコツというのは、それからまた寿命があれば、それを迎えるのも自然なことなのかなと思うのですが、ただ可能であれば世代交代をして、長寿命で行きたいと思うのですが、イベントや地域づくりにおいて、世代交代をしていく、リーダーが変わっていくための良い事例などがあったら教えていただけたら嬉しいです。

○中塚氏（講演者）

難しいですね、イベントですか、学校の世代交代というよりそういう意味じゃなくて。

○Dさん（質問者）

そうですね、学校と地域が一体となってイベントの世代の交代というものがうまく進む方法など。

○中塚氏（講演者）

2つのパターンがあって、一つは今あるイベントを維持していくために、ずっとリーダーを変えていく、登用の仕方のルールをちゃんと決めて。リーダーが誰であれ、変わって

いく。そうすることで無理やり変えていく仕組みを内向していく活動っていうのは、そういうのがあると思います。

それが出来ないのならば、さっきも言いましたが、違う活動にするということです。活動そのものの連続性に意味を持たせるかというところもあるのですが、それと同じものをずっと続けることが難しいのなら、横にずらして、違う新しい活動をしていく方が、新しいリーダーが動きやすいのかもしれませんが。そんなことをしたら、こっちの活動のDNAは全部消えるかというところ、そうではなく、ある程度移行されます。ですから、その時に何を残して何を残さないか、無くなってもいいのかということをごちゃごちゃと考えることが大事かなと思います。

普通の会社みたいにちゃんと登用していく仕組みがあればいいんですけど、大抵そういう所ってお金が回らない、インセンティブがかからない。お金のインセンティブがかからない活動とか、関わる人たちの思いですすめられた活動というのは、思いを持たない人達にとってはインセンティブが何も無いので動かないですよ。それ（思い）を引き継げというのは難しいと私は思っています。お金が動いていたらそんなことはないと思うのですが。

そうであるならば、もう一個の思いを作っていくって、前の話と新しい話の「柱」はどう関係するのかなという議論をした方が早いこともあると思います。

○Dさん（質問者）

ありがとうございます。

6. 拠点をつくる意味

○Eさん（質問者）

システム工学部で建築系の教員をやっています。今回たくさん共感できる事と学ばしていただけることがあったなと思っています。

拠点づくりという話だったのですが、拠点から作っていけば地域が良くなるという話を、ハッとしてしまうと箱物行政のように聞こえるのですが、今日頂いたお話の中で、全然箱物行政ではないですよ。全然違うものができている。それはなぜなのだろうとすごく思いながら聞いていました。

たぶん箱を作っているだけではない何かがあるから、こういうことが起こっているのだろうなと思います。それがなぜなのかと答えがあればお聞かせ願いたいのですが、

私は一つに、これは仕掛け人だとか黒幕だとかがいるのではないかと考えています。もしくは守りをしている人だったり管理人だったり、そういった人たちが少しずつ紐づいて

いるのかなという気もしました。箱物って何かの機能のためにありますよね。例えばホールを作る。多分機能のためには作っていない、そこには何かあるから人が集まる。何かがあるのじゃないか、それは何なのかという疑問を持ったので、聞いてみました。

○中塚氏（講演者）

ありがとうございます。先生のご専門のことなのに、出しゃばって、いろいろしゃべってしまってすみません。箱物行政っていうのは箱を作ることが目的になった行政だと思うので、そこは根本的に間違いだと思います。ここは箱を作ることが目的じゃなくて、箱を通じて人間関係なり関係性を作る目的で箱を作るというプロセスが手段だし、箱も手段だと思うのですよね。

ですので、カッコいいとかカッコ悪いというのも、ターゲットによって見方が違いますから、関わっている人たちにとって格好いいものを作らないといけないのが大事で、全員にとって格好いい必要はないかなと思います。私は、カッコいいことが大事でこういうタイプの箱は大事だと思うのですが、それは関わっている人たちの評価だと思います。

答えになっているか分からないですけども、そのプロセス手段として箱は位置づけているところが違うかなと思います。

○Eさん（質問者）

仕掛け人とか黒幕とか、もしくは管理人みたいなものがこの場所にはいるのか。要するにビオトープっておっしゃったのですが、そこに住んでいるような紐づいて何かあるのでしょうか。

○中塚氏（講演者）

もちろんその人たちがいてこそその箱なので、作っていく手段プロセスでいうと、その人たちによって作られていくプロセス、というか、ものが変わっていくので、すごく大事ですよ。その人の関係性の作り方とか空間管理の仕方そのものも大事ですし、人間との関係性づくりも大事だと思います。極端なことをいうと部屋を綺麗に管理できない学生が管理人になると、部屋がめちゃくちゃ汚くなるのですよ。当たり前なのですが、これが一番ダメで、会う度に片づけのことを言わないといけない。そんなレベルからですね、管理人が箱を作っていくということかなと思います。

○辻（座長）

話の中に、そういうものを作ることをやってきた人もリーダーではない。そこからリーダーが育つのもかもしれないですけど、そういうことを仕掛けていく人も地域のリーダーな

のですよね。そういうことですね。

○中塚氏（講演者）

私としては、そこに入ってる人はリーダーとして、「埋め込んで」いますからね。登用というレベルではなく、もっと深い意味で。でもその中で例えば学校施設の場合ですけども、いろいろそこで作っていく中で、その人たちが成長してもらっていったらいいのではないかと思います。

○辻（座長）

他に、質問どうぞ。

7. 空き家活用のプロセスについて

○Fさん（質問者）

先ほどの福住地区の空き家の話の中ですが、この地区で空き家があってそれをそういう施設に使ってもいいと許可があったのか、また住民はこの街に住んでいたのかも含めて、その辺をもう少し詳しく参考になる話をしてもらえたら。簡単に協力してくれたのか。

○中塚氏（講演者）

福住地区の場合は、もちろん空き家になっているので、そこに住んでいない家がいっぱいあったということもあるのですが。他の地区と同じように最初は貸すのが嫌だっていう議論がいっぱいありました。さっきの「さんばやひぐち」の例や、他の何個かの改修事例を見ることによって、そうしてもお金の面でも利用の面でも、こういう状態になるのだと、貸した場合や売った場合、改修だけした場合とか、こういうパターンで町は良くなっていくのだ、自分の家はこういう風に使われるのだ、目にみえてわかると、それをみながら、じゃあうちもいいかなあという風になる。何かみえない物に対して、やはり最初の一人二人は大変なのですが、実際に目にみえてくると出てくると、その方が広がりやすいということはあると思います。

○Fさん

はいわかりました、最初の一軒が非常に良かったのですね。

○中塚氏（講演者）

最初の一軒を作る時に、最初の自治会長さん達は、やはり色々な調整をしているのです

が、そこが大事ですよ。一軒目で失敗すると 10 年ぐらい動かないかもしれない、その最初の一軒が大事になります。

○辻（座長）

ありがとうございます。他に、ご意見・ご質問ございませんか。

8. 学生団体と地域の活動拠点・地域連携について

○D さん

2 回目で申し訳ないですが…。先ほど話のありました学生団体がいくつも地域で誕生して活動を続けられているということなのですが、この活動拠点というのは、地域の方で用意いただいて活動されているというお話だったのですが、どんなものを具体的に使っているのかという点と、あと具体的な活動内容や地域でどんなことをやっているか、地域の人たちとの連携はどうしているか等、そういったところを具体的に聞かせていただけたら、と思います。

○中塚氏（講演者）

いっぱいあって説明しづらいのですが、拠点もいろんなパターンがあるのですよね。

普通に農事組合の倉庫みたいな一角だったりとか、篠山まちづくり協議会って言ってますけど、地域運営組織の事務所をやっていたり、拠点にしていたりとかで色々あります。

にしき恋という団体は、学生たちもすごいのですが、受け入れ側がまた素晴らしく、まちづくり協議会の事務所を学生のために自分たちで改修したのです。

宿泊してはいけない場所なのですが、泊まるじゃないですか、そのために 5 年程経過後、シャワー室とかを作ったりとかですね、そこまでやるとやはり学生は定着しがちですよ。

そういう動きの中で、さっきの「地域ラボ」っていうのは市の政策ですけども、それを組み合わせてしたりしながら、最近もうちょっとリニューアルして、もう少し使いやすい拠点に変わってきています。活動は様々です。祭りを年に一回ほど行っているだけの活動もあれば、農業のお手伝いをやっているサークルもありますし、140 人ぐらいいるさっきのにしき恋なんかは、140 人が一気に来るとそもそも無理なので、でも毎週末その地域に誰かが入って農作業をやっていたりとか、そこから農家になった子がいたりもします。また、その農家の先輩農家になったところを手伝っていたりとか、販売を行ったりなど。幅広く活動をしていますけども、私としてはデザインしている部分はあるのですが、最初の方に行っていた研究が自分の中のベースではあるのですが、どこまで介入してどこまで介入しなくていいのかというところの、デザインの程度がすごく大事ななと思っています。

これについては毎年場所を変えるということは、私のほうで決めています。実は、一箇所でやり続ける方が楽なのですが、毎年変えていくという仕組みすることによって、面的に広がるだろうと思い、変えています。実際、2年3年同じところで活動をしているとお互いに飽きてきます。

調整する側は大変なのですが、農家側もどうしてもサービスの的になってしまうので、やっていると大変ですけど、1年ならよかったねで終わることができる。また来て欲しいと思って頂いて終われるかもしれない。

○辻（座長）

今のにしき恋の活動や、篠山での取り組みのことについては、食農総合研究所の研究成果第5号に詳しく掲載しています。HPからも見て頂くことができますので宜しければご参考までにご覧ください。他にご質問ございませんか。

9. 人が定着しやすい生活環境づくりについて

○Gさん

和歌山県内の紀美野町で、10年来、定住のことをやっています。今日は地域おこし協力隊の先生の話、すごい役に立つのがあるよというようなことから、3人来ました。なんかヒントが見えたような気がします。この10年、移住と定住の仕事を行ってきました。

14年前の移住と今の移住の違いってというのは、ひしひしと感じています。がっつりした移住から気軽な移住へ、軽いというのはすごい負担になるような移住ではなくて、興味のあることから始めるという移住に変わってきているのを感じます。その中で人も生き物だし、定住しやすい場所というのは、今日はこれすごい参考になりました。目指して行くべき道がここにあるのではないかなと思っています。今日のお話すごい興味深く聞かせて頂きました。本当にありがとうございます。

○中塚氏（講演者）

移住者のための生活環境を作っていることが、多分住んでいる人たちの生活環境に繋がると思うので、どちらが先でもいいと思うのです。やっぱり住んでいる方々が美しく住んでいる場所には、人が入ってきやすいと入ってこようと思いますし、そういう順番もあればいいですし。

そうじゃないところならば、移住者のために良い環境を作ろうとすることが回り回ってというか、地域にもともと住んでいる人たちに良い環境になるっていう流れもあると思います。

よく言われるのですが、移住者のためにやっているのかと言われるのですが、そうではなくて回り回って絶対地元の人たちの生活環境の改善にもつながるっていう、住みやすさにつながるんですよっていう話をよくします。

10. 利用と所有のミスマッチの解決に関して

○Hさん

食農総合研究所のものです。今日は本当にありがとうございました。私も大学の地域連携の話に関心があったもので、先生のお話からいろんな所でヒントをもらいました。この資料にあったことでちょっと一点、質問させていただきます。「拠点」でつなぐ多様な主体のタイトルのスライドの中に、利用と所有のミスマッチの解決が課題と書かれてありますが、その意味というかその辺りをもう少し詳しく説明頂ければ。

○中塚氏（講演者）

ありがとうございます。実はそのことは私のずっと研究しているテーマなのです。元々私自身はオーナー制度の研究がスタートでして。オーナー制度というのは、物を売るのではなくて、あれは利用と所有の分離をしているのだと私は位置付けています。

先ほどのため池の話もそうですけど、持っているけどもう使わないっていう資産が地域にはたくさんある、あるいは生まれてくると思うのです。それを売るとなるとすごく大変なコストがかかってくると思うのですが、売らない形でも使えるそういう仕組みを作っていくことが大事で、それをミスマッチといっています。

使いたいのに使えないというような、本当は使って欲しいのだけでも使ってもらえないみたいなことをあるのであれば、それをうまく条件整理をして解決していきましょうということです。古民家の改修も農家さんと一緒に話をしていることも実はそういうことです。現在、所有と利用を無理やりにでも剥がしていく作業をしています。

山も何もかも所有者がしないといけないということになっちゃうと、そこで止まってしまいますから。上だけ使える状態とかなんとか作れないかなあと。そういう意味でこういう人たちにも、ここの利用をできるようにしましょうと、多様な人たちが利用できるようにしましょうという意味で書かせてもらいました。

○辻（座長）

ありがとうございます。よろしいでしょうか。それではずいぶん時間が経ちましたので、ここで終わりにしたいと思います。先ほど参加者の方がおっしゃられたようにですね、住みよい地域を作るにはやっぱり拠点作り、住みよい環境を作れば、人がいろいろ集まって

くるという話にあったと思いますけども、そういうことつきようかと思います。
それでは終わりにしたいと思います。もう一度先生の方に拍手をお願いします。
本日はどうもありがとうございました。

付属資料

都市農村共生研究ユニット研究セミナー 拠点づくりからの農山村再生 ー 田園回帰時代の新たな農村計画論 ー

11/7
木曜日

和歌山大学食農総合研究所 都市農村共生研究ユニット研究セミナーを下記のとおり開催いたします。

住民の多様化と農山村への関心の高まりや政策的な後押しなどで拠点づくりへの関心が高まっています。本セミナーでは、人々が集まる場所と機会が急激に減少する中、地域再生の「手段」として拠点の持ちうる意味を再考するとともに、その形成プロセスと要点を事例を通して考えたいと思います。



講師

中塚 雅也 氏 神戸大学大学院農学研究科 准教授

<プロフィール>

1973年生まれ 神戸大学農学部卒業

緑地設計コンサルタント、(財)丹波の森協会等にて地域づくり実務に携わりながら、2004年、神戸大学大学院自然科学研究科博士後期課程修了、博士(学術)。

神戸大学助教、英国ニューカッスル大学農村経済センター(Centre for Rural Economy) 客員研究員などを経て、現在、神戸大学大学院農学研究科食料環境経済学講座 准教授。農学研究科地域連携センターを総括。専門：農業農村経営学、農村政策、農村計画。



時間

14:00 ~ 16:00

場所

和歌山大学 北4号館 多目的研究室
(産学連携イノベーションセンター)

参加
対象

研究ユニット参加教員、学内教員、
学生、院生、県・市町村・農協等の
関係者 ほか

連絡先

■食農総合研究所 事務局

- 辻 (073-457-7750 / tsujik@wakayama-u.ac.jp)
- 植田 (073-457-7714 / uedaj@wakayama-u.ac.jp)

*お問い合わせなどございましたら遠慮なく事務局までご連絡ください。

拠点づくりからの農山村再生

－田園回帰時代の新たな農村計画論－

2019.11.7

神戸大学大学院農学研究科

中塚雅也

nakatsuka@port.kobe-u.ac.jp

1

はじめに：自己紹介

- 生まれ育ち：和泉 ↔ 神戸 ↔ 丹波
緑地コンサル，丹波の森協会，
ニューカッスル，地域連携センター
- 所属・専門：農業農村経営学
地域づくり，農業経営，農村計画・政策
- 具体的な研究として：
 - ✓ 地域共生型の農業経営
(オーナー制・市民農園・ツーリズム，産直・直売所・
FM，農家レストラン，家族農業経営)
 - ✓ 地域の人材育成と定着推進
(新規就農，起業・継業，域学連携)
 - ✓ 地域資源と固有性のマネジメント
(農地・水(ため池)，知識，文化・祭礼，種)

2

なぜ今、「拠点」？

3

1. 経験的に

- よい地域には、よいコミュニティがある
- よいコミュニティには、よい拠点がある

- 人も生き物
生息しやすい場所（空間）がある

- 人を増やすには、生息しやすい場所をつくることから始めるのもよい？
= **ビオトープづくり**

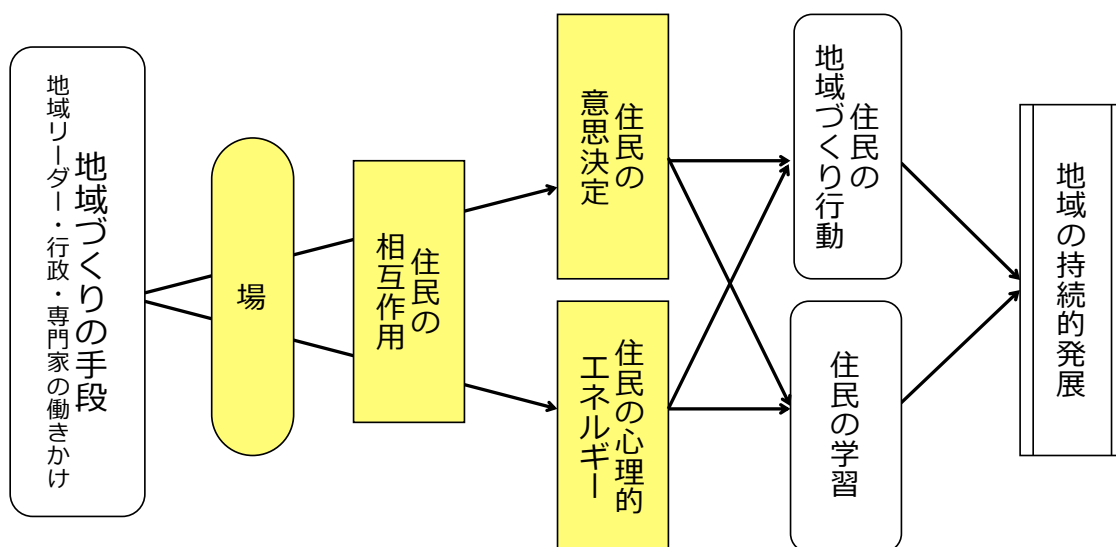
4

2.理論的には

- 「場」の論理（伊丹,2005）
人々がそこに参加し、意識・無意識のうちに相互に観察し、コミュニケーションを行い、相互に理解し、相互に働きかけ合い、相互に心理的刺激をする、その状況の枠組み
≠物理的な場所
- “容れ物”の中での情動的・心理的相互作用
→共通理解，情報蓄積，心理的共振（エネルギー）

5

地域づくりのプロセスと場



※ は目に見えないもの

資料：中塚ら（2009）（伊丹（2005）p.93をもとに作成）。

6

場の生成のタイプ

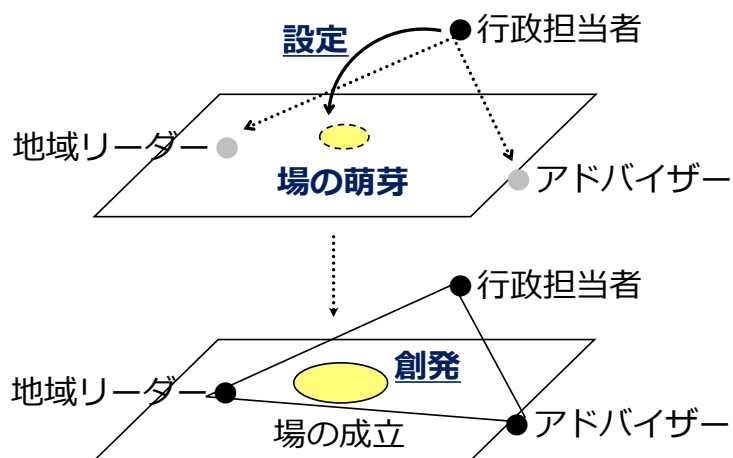
- ・ 萌芽と成立の2段階に分ける
- ・ どこにどのように介入（設定）するか？

		成立	
		設定	創発
萌芽	設定	設計される場	開花する場
	創発	育成される場	自成する場

資料：伊丹（2005）p.199より転載。

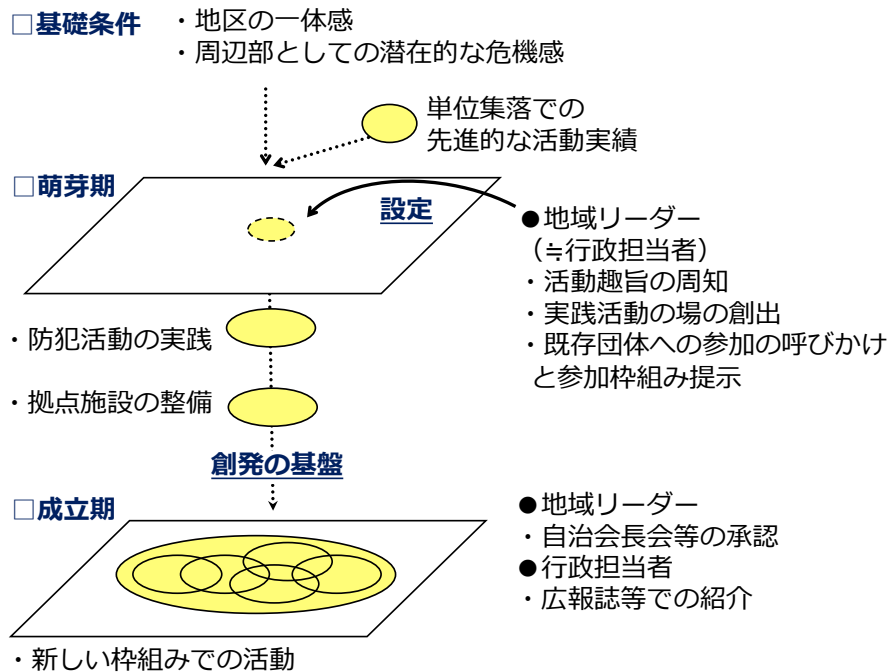
7

地域運営組織の設立と「開花する場」



8

丹波篠山市のRMO設立のプロセスと「場」



9

3.政策的には、

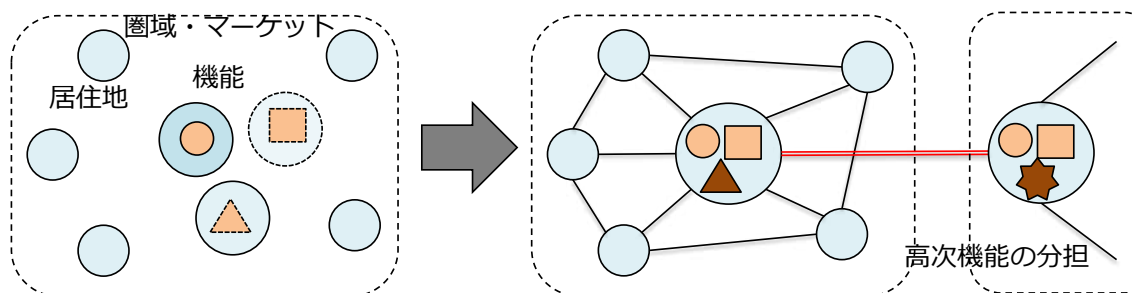
- ・ 第二次国土形成計画（2015）
- 農山村に関するキーワード
 - ・ 「対流」・・・→ 個性，多様性
 - ・ コンパクト+ネットワーク
 - ・ 地域構造の将来像（「小さな拠点」，「コンパクトシティ」）
 - ・ （地域に依拠した）魅力ある「しごと」の創出，
 - ・ 移住，二地域居住，二地域生活・就労
 - ・ 地域を支える担い手の育成
 - ・ 共助社会づくり

10

コンパクト+ネットワーク

ネットワーク：

- コンパクトにまとまった各地域をつなぎ、利便性を向上、圏域人口を拡大
- 地域が連携して役割分担（低次、高次の機能）、イノベーションの促進
- **災害対応、観光対応、医療対応**
→「重層性と強靱性」



国土交通省(2014)「国土のグランドデザイン2050」参考資料、より

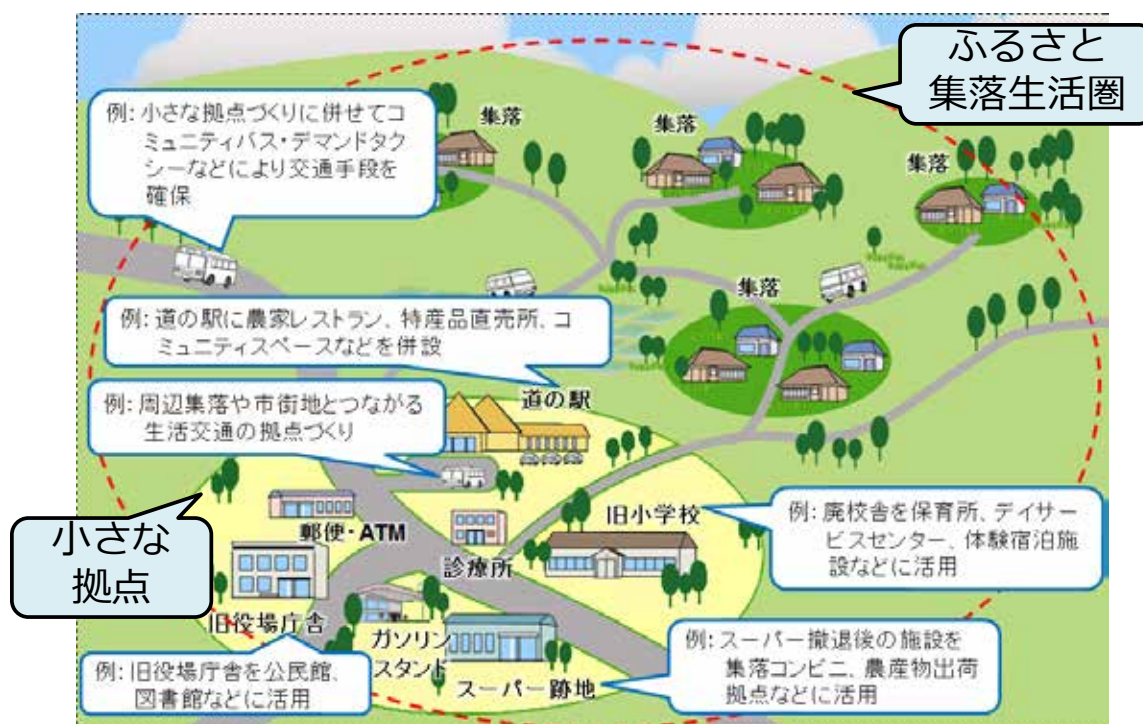
11

「小さな拠点」

- 小学校区など、複数の集落が散在する地域において、商店、診療所などの**日常生活に不可欠な施設・機能や地域活動を行う場所**を、歩いて動ける範囲に集め、周辺集落とコミュニティバス等の交通ネットワークで結ぶことで、人々が集い、交流する機会が広がっていく、**集落地域の再生**を目指す取組
- 経緯
2009年度：国土交通省過疎集落研究会報告書
「小さな拠点」→ 関連基礎調査
2012年度：「小さな拠点」づくり検討会、ガイドブック
2013-2014年度：モニター地域調査 →事業化

12

「小さな拠点」と「ふるさと集落生活圏」

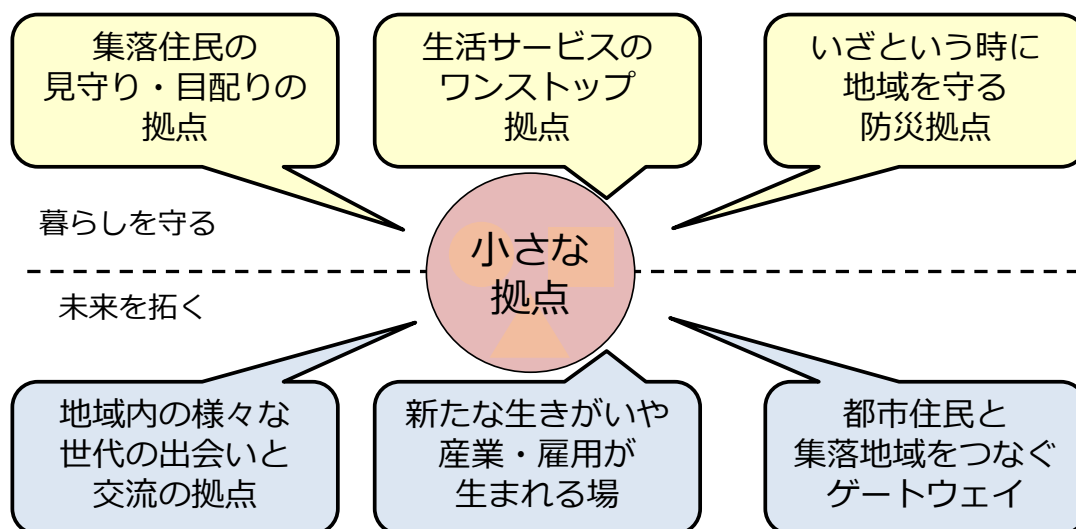


国土交通省(2014) 資料より転載

13

「小さな拠点」の役割

- 暮らしを守る「生活の拠り所」・・・**守り**
- +
- 未来への展望を拓く「定住の砦」・・・**攻め**



国土交通省(2014)『「小さな拠点」ガイドブック』より

14

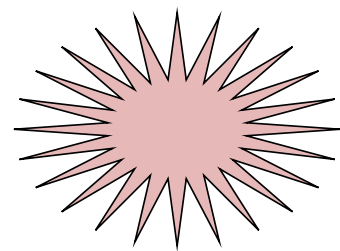
「小さな拠点」のポイント

- 「**小さいからこそ**」 ←→ 規模の経済
近い場所につくれる，機能を組み合わせられる，
自分たちで出来る， 地域の人や資源を活かせる
- **つなぐ**（範囲の経済） ←→ 分業（藤山浩氏）
 - **役割をつなぐ**：
個別では採算の合わない生活サービスや活動をまとめ，相乗効果で利用拡大
 - **空間をつなぐ**：
点在する生活サービスを歩いて動ける範囲で組み合わせる
 - **時間をつなぐ**：
配達の帰りに農作物を集荷するなど，時間をうまく使って，異なる活動を合わせ技で行う
- ハードとソフト

15

「小さな拠点」の要点と課題

- 「小さな拠点」づくり
= 拠点とネットワークづくり
- 現場では，地区内での集約化のイメージがつかまとう
→ 実際，現場で「**「小さな拠点」をつくりましょう！**」とは言いにくい
- **≠コンパクト・ビレッジ**
居住地を集めたり，資源を地区内の小さな中心部にすべて集めるのではなく，**どう機能を分けるか**が課題（二重，三重のレイヤー）
- 周辺部の拠点（**「小さな小さな拠点」**）の議論とそのネットワークから，はじめるべき



拠点イメージ

16

事例：高知市土佐山地区（旧土佐山村）

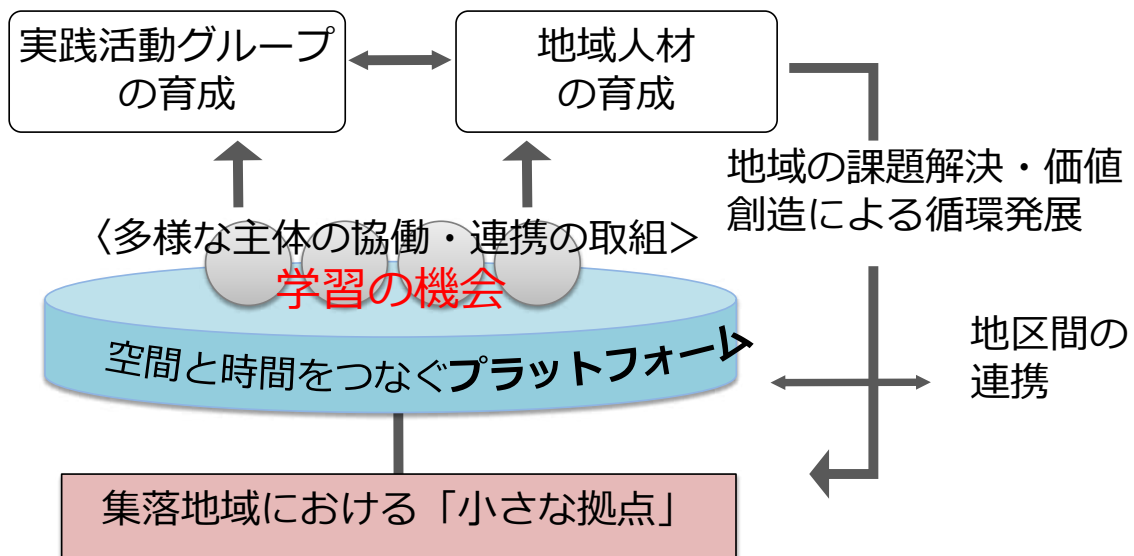
人口約1,000人
(1955年 2,500人)



17

「小さな拠点」に求められる人材育成機能

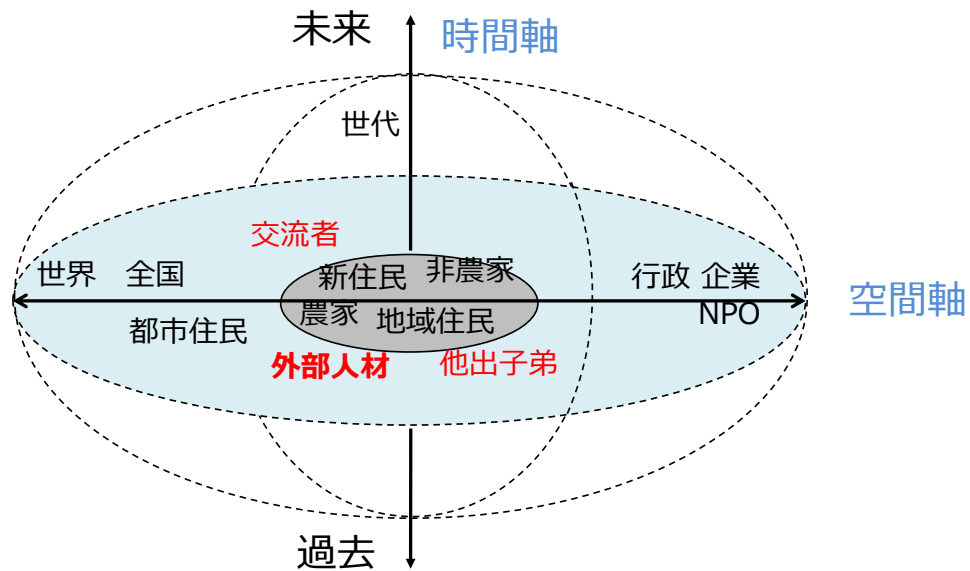
- ・ 人材育成と創造の拠点（＝「場」）が必要
- ・ 「場」を支えるハードとしての拠点の重要性



中塚雅也（2013）：多様な主体の連携・協働と「小さな拠点」づくり，人と国土，39（2） 18

「拠点」でつなぐ多様な主体

- 多様化する（すべき）集落の担い手
- （利用と所有のミスマッチの解決が課題）



19

拠点づくりの事例

20

改めて、「場」をつくるとは？

- 「場」：
物理的な場所 ↔ しくみ・機会
- 双方の「場」が失われてる&形骸化している
- 現状をしっかりと見直し、「場」を再設計・再設置する
→集落の内と内，内と外，
空間・時間，人と資源

21

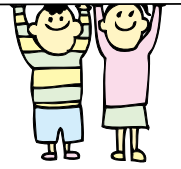
地域活動の展開における拠点づくり

【丹波篠山市福住地区の事例】
(正統派の展開事例？)

- 2010年「さんばやひぐち」を住民主体で改修・開設
- 2014年「福住地区まちづくり計画」策定
空き家改修と起業・移住の増加
- 2016年 福住小学校閉校
(活用検討委員会の実施)
- 2018年「みんなでつくる文化と暮らしの学校」
SUKUBA として新たな拠点形成へ

22

福住地区 まちづくり 計画



まちづくりの方向性

福住地区のまちづくりは、住民を中心として、福住地区大に暮らしが、ともに力をあわせながら、自由にすすめていきます。

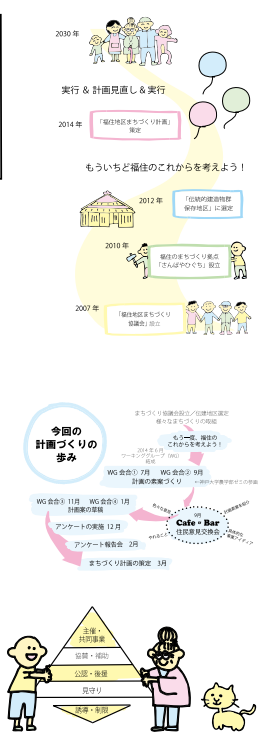
これまで福住地区では様々なまちづくりの取組がすすめてきたが、一環、みんなで、やるべきことと方向性を確認して、あつと、まとめたのが、15の方向性（ビジョン）です。（2030年に向けて）としました。

この15の方向性は、さまざまな機会をとじて、みんなの声を聞き取りながらすすめていくものです。不十分どころもあるかもしれませんが、「つくったから終わり」の計画とせず、実行に移した後も見直ししていきたいと思っています。

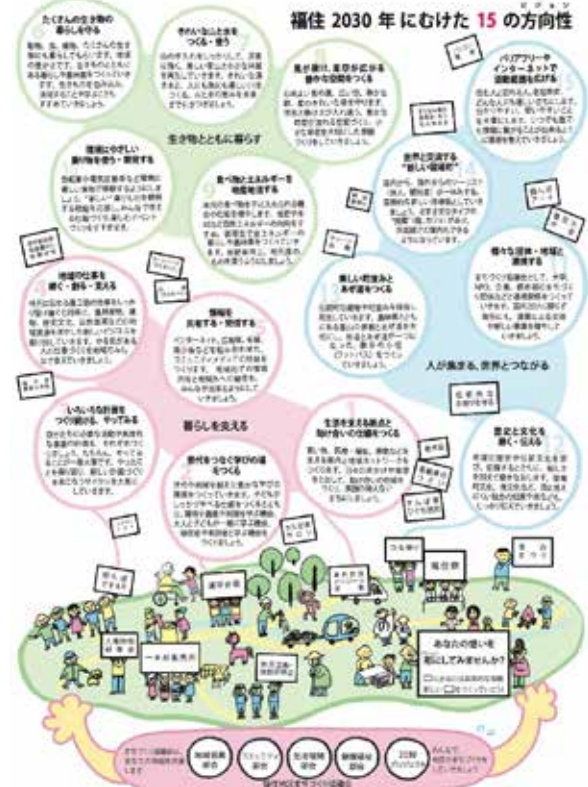
まちづくり協議会の活動支援体制

もちろん、まちづくり協議会では、これまでの活動のペースに、調整を取り組んでいます。

しかし、計画を実行に移すには、協議会のみならず、福住地区大に暮らしが、みんなの力が必要です。まちづくり協議会では、そうしたみなさんの福住地区での活動、事業をしっかりとサポートしていきたいと思っており、その一部として、活動の調整と支援を行っています。十分なことはできませんが、みなさんの活動を、思いを実現できるように、力をあわせていきたいと思っています。



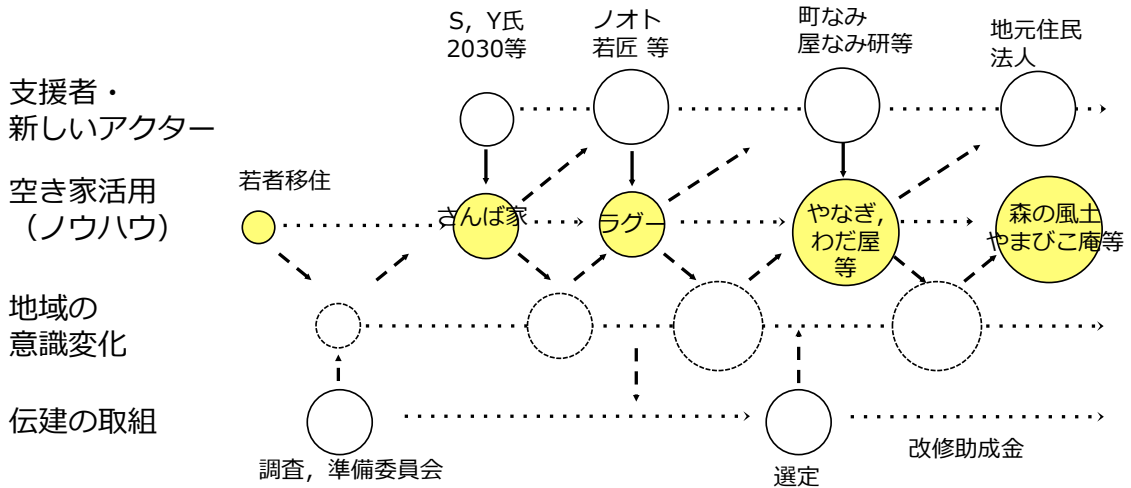
福住 2030年に向けた15の方向性



福住地区での主な空き家利用

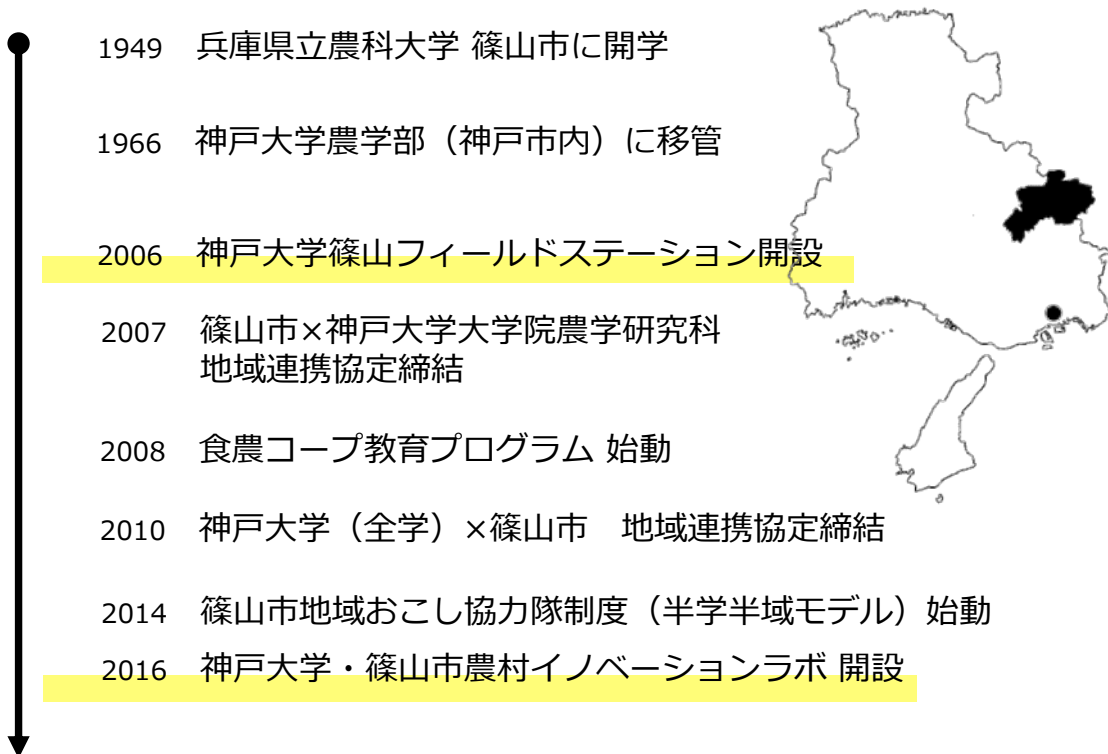
名称	改修年月	利用形態	利用者	所有者 (元の利用)	利用方法	改修協力	行政支援
1 C住宅※	2001.2	住居	個人 (移住)	個人 (住居)	賃貸	-	-
2 F住宅※	2001.2	住居	個人 (移住)	個人 (住居)	賃貸	-	-
3 さんば家ひぐち	2010.7	地域交流拠点	福住地区まちづくり協議会	個人 (住居)	10年貸借契約	S設計事務所、市内工務店、2030プロジェクト、福楽里	兵庫県県民交流広場事業
4 Trattoria al Ragu	2012.5	イタリアンレストラン、住居	個人 (移住)	個人 (住居)	サブリース、10年貸借契約	プロト、S設計事務所、若匠、一般ボランティア	篠山市空き家活用事業 兵庫県地域の夢推進事業
5 A住宅	2012.7	住居	個人 (移住)	個人 (住居)	賃貸	-	-
6 古民家ゲストハウス やなぎ	2012.8	ゲストハウス	個人 (移住)	個人 (住居)	購入	S設計事務所、町なみ屋なみ研究所、若匠、一般ボランティア	-
7 SORTE GLASS	2012.9	吹きガラス工房	個人 (移住)	福住地区財産管理組合 (旧JA倉庫)	賃貸	自主改修	-
8 S住宅	2012.9	住居	個人 (移住)	個人 (住居)	賃貸	-	-
9 エムシステム	2012.9	音響機器	法人 (移住)	福住地区財産管理組合 (旧JA倉庫)	賃貸	自主改修	-
10 福楽里	2012.9	郷土料理工房	女性グループ (通勤)	福住地区財産管理組合 (旧JA支店)	賃貸	自主改修	-
11 丹波篠山ジグザグパブリック	2012.7	地ビール醸造所	個人 (住民)	個人 (パソコン教室)	購入	自主改修	-
12 福住 わだ家 (篠山暮らしお試し住宅)	2013.3	移住体験施設	福住地区田舎暮らし体験住宅運営委員会 (まち協)	個人 (旧郵便局)	10年貸借契約	S設計事務所、市内工務店	兵庫県田舎暮らし推進モデル事業、篠山市空き家活用事業
13 篠山フィールドフラット	2014.1	住居・交流拠点	個人 (移住)、大宇関係者	個人 (住居)	購入	S設計事務所、市内工務店	兵庫県/篠山市空き家活用事業
14 農家民宿 森の風土	2015.8	民宿	個人 (住民)	個人 (住居)	購入	町なみ屋なみ研究所	文化庁広域保存修理事業、兵庫県/篠山市空き家活用事業
15 デイサービス やまびこ庵	2015.7	デイサービス	社会福祉法人	個人 (住居)	購入	-	-
16 フードショップ小畠	2016.11	和食店	法人 (住民)	法人 (製造工場)	購入	-	篠山市起業支援
17 SATOYAMA STOVE	2017.5	薪ストーブ	法人 (移住)	福住地区財産管理組合 (旧JA倉庫)	賃貸	自主改修	-

空き家を中心とした展開構造



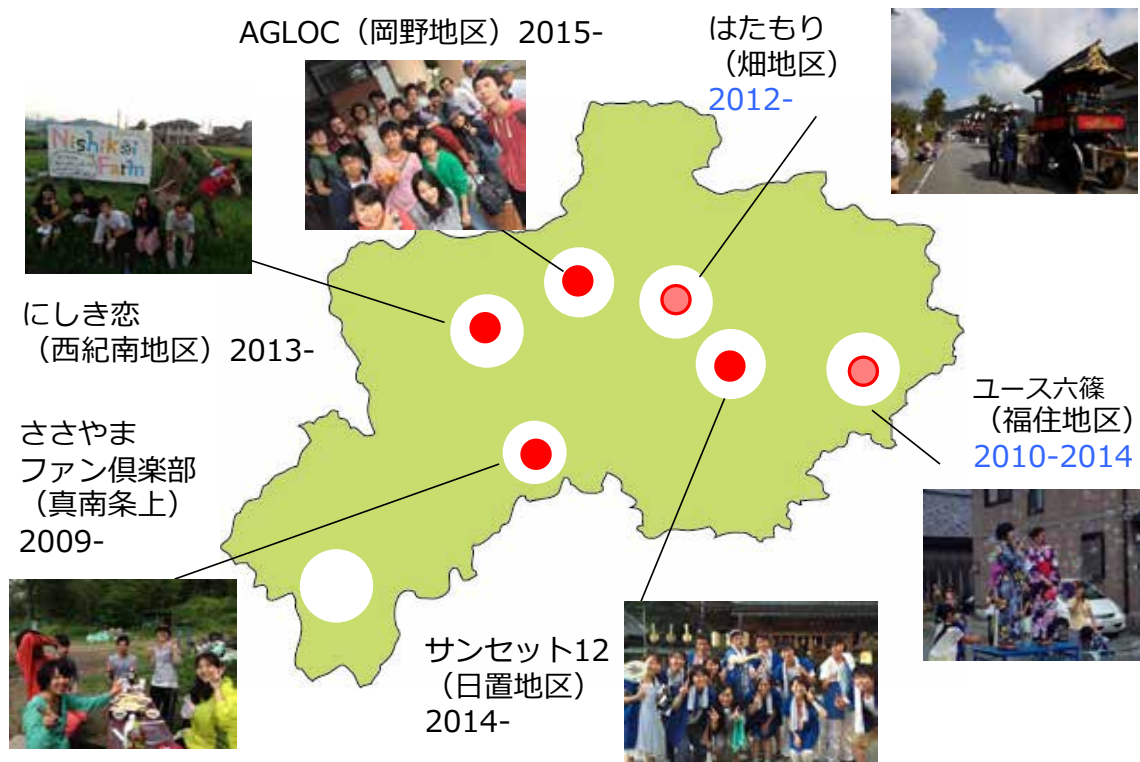
25

大学連携にみる拠点づくり：丹波篠山



26

課外への展開： 学生団体の誕生



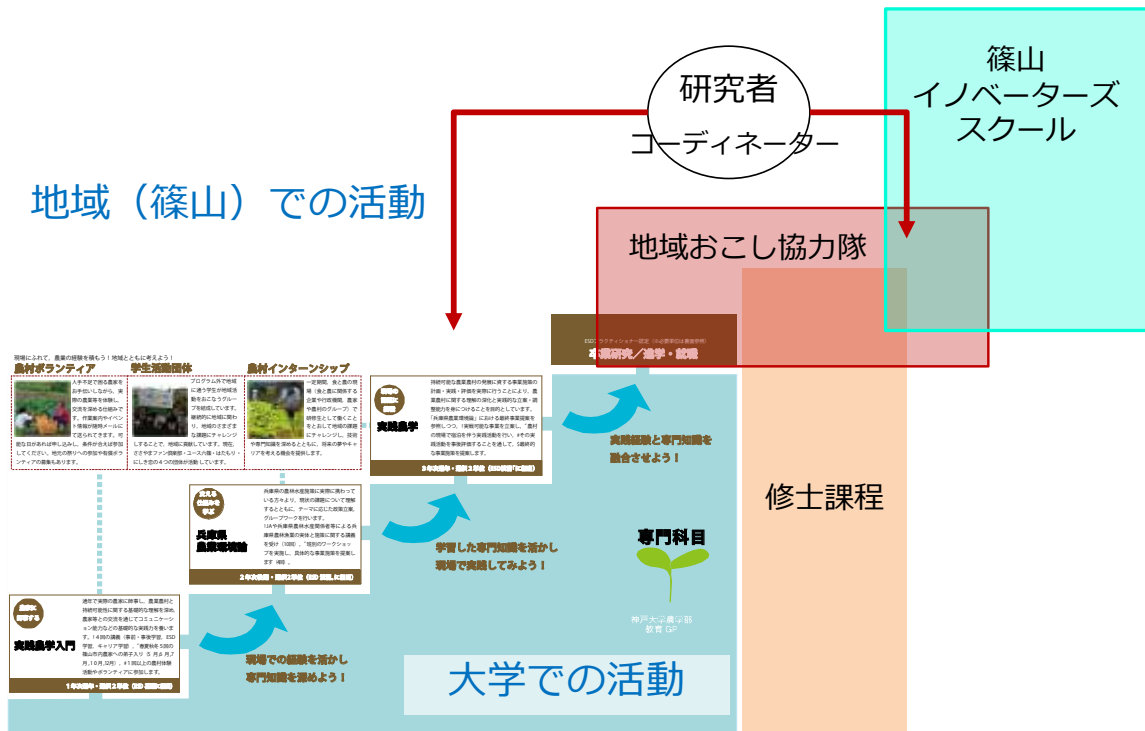
29

地域の人材育成へ

- COC+ (大学) & 地方創生事業 (篠山市)
- 学生だけでなく、**地域の人材育成** (起業・継業／移住の促進)
- JR篠山口駅 (駅構内の市所有地を改修)
神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ
- 篠山市主催「篠山イノベーターズスクール」
2016年10月開講

30

大学活動と地域活動との境界開発



31

これまでの成果 (2019/10現在)

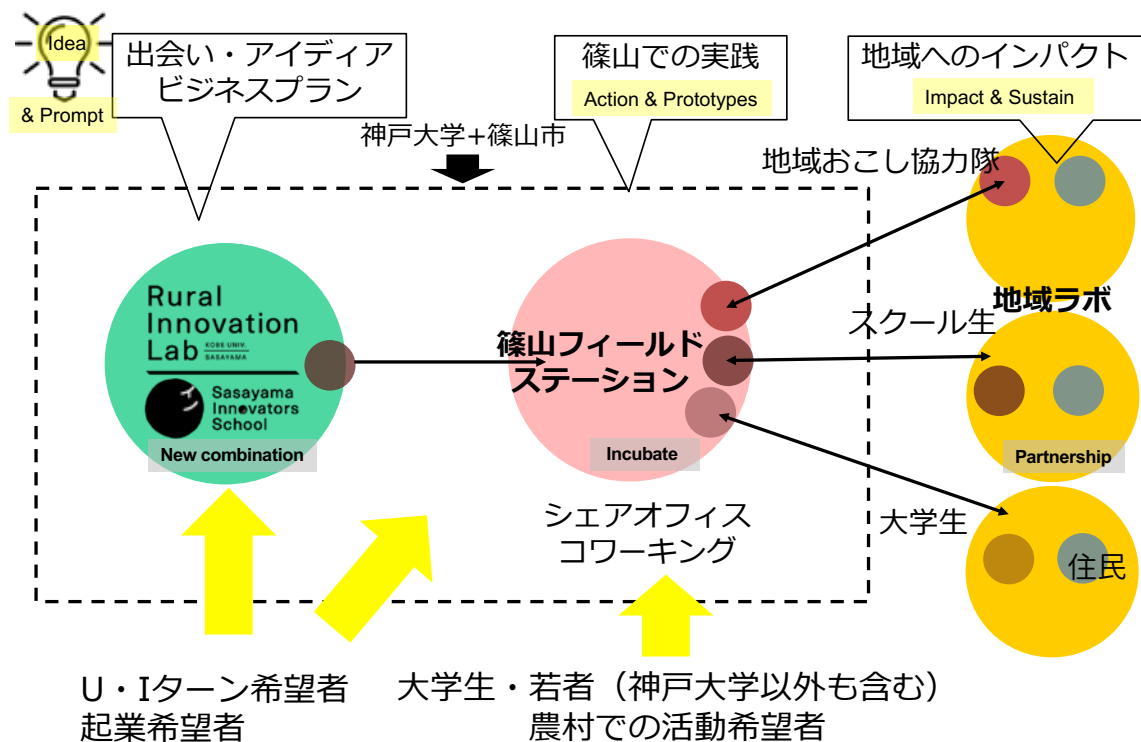
- 受講生：88人 → **2割**が起業へ（**11名**の移住）

	受講生	起業者 (うち市内)	
		うち 篠山外	
1期 (2016年10～2017年9)	19	14	5(3)
2期 (2017年4～2018年3)	23	17	8(5)
3期 (2017年10～2018年9)	18	10	4(3)
4期 (2018年4～2019年3)	34	26	3(2)
計 (重複のぞく)	88	64	20 (13)

※複数回受講者による起業は、最終受講年にてカウント

32

篠山市で目指しているもの：シムレースな体制(エコシステム)



33

大学連携にみる拠点づくり：東播磨地域

- 2016 兵庫県東播磨県民局より、ため池管理の方針に関する相談
- 2016 3大学（神戸大・京都大・兵庫県立大）の研究者による研究会設置
- 2017 東播磨フィールドステーションの設置を提案
- 2018 東播磨県民局×神戸大学大学院農学研究科×京都大学大学院農学研究科×兵庫県立大学地域創生機構による地域連携協定締結
東播磨フィールドステーション開設
- 2019 研究・実践活動を展開
（九州大学，東京農工大学，リーズ大学との共同研究の展開 + 神大，京大，東農大からの学生インターン研究の受け入れ）

34

活動と組織の変革のための拠点づくり

【島根県真砂地区の事例】

- 公民館が中心となった先進事例
→しかし、世代交代や停滞打破が課題
- 若者が中心となったもう一つの拠点をつくる

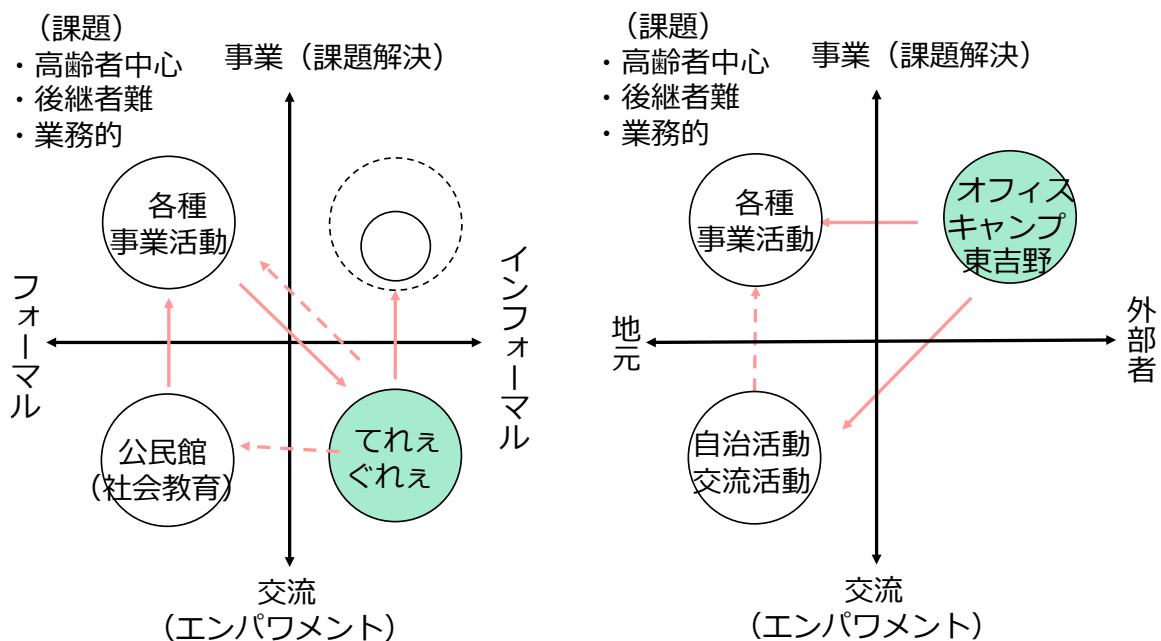
【奈良県東吉野村の事例】

- 地元の人材不足
→外部人材の活用が課題
- 外部者が中心となった拠点をつくる



35

活動と組織の変革のための拠点づくり



真砂地区における活動の変遷と拠点

東吉野における活動の変遷と拠点

36

「拠点づくり」から始める

- ハードとしての**拠点**に再注目
→拠点から，組織や「流れ」を変えられる！
(+シンボル機能，継続の担保機能)

ポイント

●設立：

- ① ずらす
- ② 自分たちでつくる
- ③ 見た目と居心地が良いこと
- ④ 繋ぎ手の存在



●発展：

- ① 開けておく
- ② 自由度と中立性を保つ
- ③ 新しいことを行う

- ハード⇔ソフト ← **介入方法と環境整備**

37

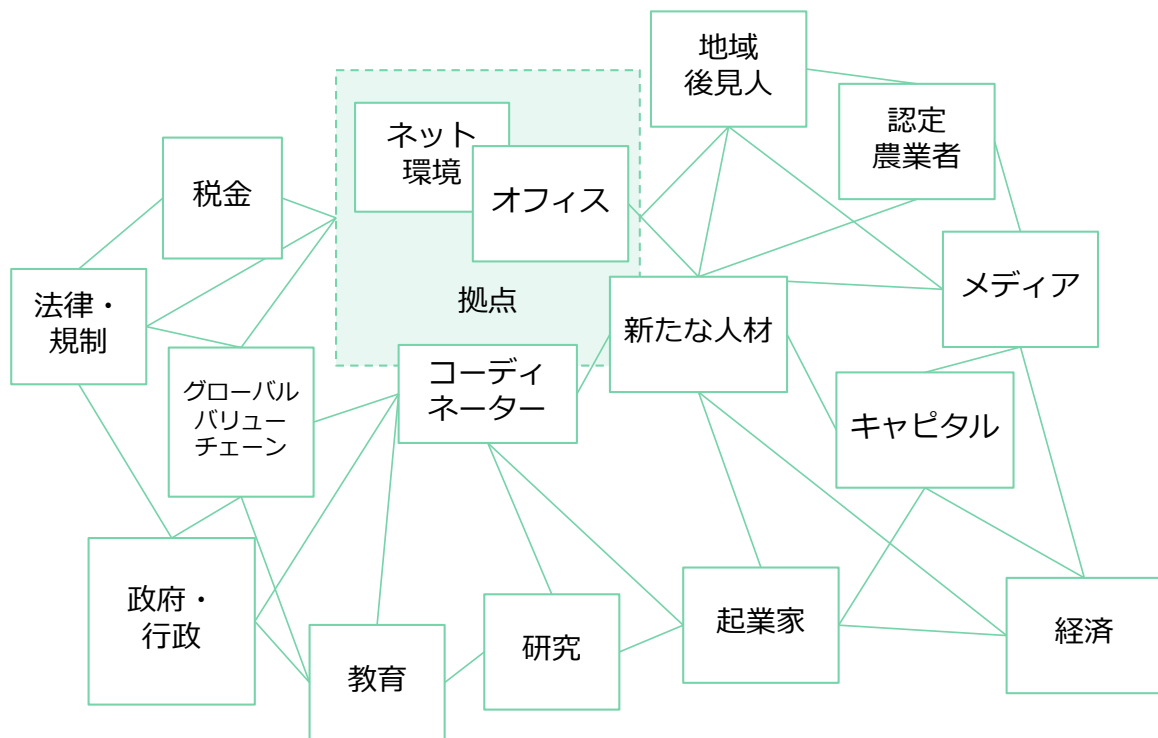
エコシステムの構築へ

- 生き物が育ちやすい環境があるように，人が育ちやすい環境がある。
- 新しい取組やアイデアも，エコシステムから生まれる。
→多様な人が関わり合いながら，関わりの中で生まれてくる

⇒種が飛んできた時に，育つ土壌づくり
⇒ビオトープづくり＝拠点づくり
⇒エコシステムづくり

38

⑤地域エコシステムとして対応



39

「ずらす・繋げる」と中間組織・人の役割

- 変化を生み出すポイント：
既存の構造，ネットワーク，関係性，などを
少しずつずらす&そして改めて繋げる

例えば：

新しい拠点づくり

若者だけや女性だけの会議

子どもの定住・就農→ 孫ターン，孫継承

継承の「セットアップ」

- そこでは，中間的な役割を果たす組織・人の機能
発揮が求められる
⇒大学関係者の役割？

40



TAMBA SASAYAMA
CHIKIOKOSHI

丹波篠山で 起業 しませんか？

丹波篠山市では、
地元のパートナーとともに
新しい仕事、農村の未来を
創る仲間を募集します。

【2020年4月～活動する隊員対象】



兵庫県丹波篠山市
発行年月 2019年8月

地域おこし協力隊とは？

地域おこし協力隊は、2009年より総務省が導入した制度で定着することを目指しています。丹波篠山市では、市内に19

2タイプの活動形態があります。

1 起業支援型

週5日/1年(最大2年)

地域起業を目指す方対象。地域資源を活用して起業し、その成果を地域に還元する事業を行いながら、地域活性化のために活動していただきます。



2 半学半域型

週3日/最大3年

現役の学生や大学院生、研究者対象。地域課題の解決や新たな価値創造につながる調査研究を行いながら、地域活性化のために活動していただきます。



サポート制度

① コーディネーターや仲間同士でのアドバイス・相談対応

丹波篠山市との官学連携に取り組む神戸大学農学部よりコーディネーターが派遣され、隊員の活動を支援します。週1回の定例ミーティングでは、隊員が一堂に会します。地域との連携がうまくいかない時や、活動で困った時などはお互いにサポートしあいます。



② 「篠山イノベーターズスクール」、各種団体との連携による創業・移住支援

市が主催する農村起業スクール「篠山イノベーターズスクール」のサポートが受けられます。ビジネスモデルづくりから地域での実践、離陸まで、スタートアップに向けたPDCAを支援します。専門家を交えた「ビジネスモデル構築ゼミ」での事業計画作成支援、地域資源や起業仲間、地域の人材とのネットワークを提供します。

※隊員がスクール正規生に申し込むと、通常8万円のところ、6万円でセミナー・CBLが受けられます。
(詳細は「篠山イノベーターズスクール」ホームページを参照/料金は変更の可能性あり)



③ Wifi、プリンター完備の共同オフィスがいつでも利用可能

協力隊のコワーキングオフィスとして、丹波篠山市街地にある「丹波篠山フィールドステーション」を利用可能です。インターネット、プリンターが基本無料で利用できるほか、打ち合わせスペースとしても、自由にご利用いただけます。



す。地方自治体が都市住民を「地域おこし協力隊員」として受け入れ、隊員は様々な地域活動に参加することを通じて、地域に定住・ある住民組織「まちづくり協議会」が協力隊員を受け入れ、地域活性化を目指して活動していただくため、制度を導入しています。

募集内容

丹波篠山市では、まちづくり協議会単位で求める人材を募集します。各協議会の募集内容の詳細は、丹波篠山市地域おこし協力隊ホームページをご覧ください。エントリー時、希望受け入れ地域があれば第2希望まで選ぶことが可能です。二次審査終了後、受け入れ地域とのマッチングを実施し、担当地区を決定します。



先輩隊員の活動例

- 1年目** 山が好きだった小牧さん。山と地域の関わりについて知るため大学院に進学。現場を知りたいと、協力隊を志望。地域の森林組合などの協力を得ながら、里山整備の活動に積極的に参加。山についての視野を広げた1年。
- 2年目** 地域の里山について知るうち、自身も、山の価値を取り戻す活動を仕事にしたいと思うように。
- 3年目** 山のことで地域に頼ってもらえるような存在になりたいとの思いを強くし、林業家になることを決意。ビジネスとして林業を続けていくための準備をスタート。



地域の声

あんなに頼りなかった学生が、日々成長していく姿を見られて嬉しい。今後は地元林業活性のために、そして自身の生業のために頑張ってくださいと思います。

現役隊員はこんなメンバー / 現役隊員 8名

起業支援型 木工家

起業支援型 カーリマン/ジビエ解体屋

起業支援型 農家民宿「うめたんFUJI」店主

起業支援型 ビラティス&エコ雑貨「しん」店主

半学半地域型 空き家を活用した場づくりを実践中

起業支援型 寺子屋カフェ&パン屋 店主準備中

起業支援型 アロマトリートメントのオーベルジュ店主

半学半地域型 農村サイクリングを通じた地域活性化の研究

2019年度 応募フロー

- 9/1~9/30 募集期間 エントリーシートのご提出 ※書式をホームページよりダウンロードください。
- ~10/21 一次審査 書類選考 / コーディネーターより可否を通知します。
- 10/31 二次審査 面談選考 / 活動計画についてプレゼンテーションを行っていただきます。
- ~12月末 地域とのマッチング、住居等の選定、受け入れ地区の決定、内定
- 2020/4/1 委嘱式(活動初日)

募集要項

- 応募要件：年齢が20歳以上50歳未満、
また、都市地域に在住し、委嘱後丹波篠山市に移住できる方。
- 活動資金：月額8,000円の報償費+活動助成金
(例年上限140万円/年)
- 募集人数：4名程度
- 活動期間：2020年4月1日~

協力隊募集説明会を開催します!

- 8月31日(土) 13:30~14:30 場所 / 起業プラザひょうご(神戸)
- 9月14日(土) 13:30~14:30 場所 / ハローライフ(大阪)
- 9月14日(土) 14:45~15:45 場所 / 農村イノベーションラボ (丹波篠山)
- 9月28日(土) 14:00~15:00 場所 / ドットミー(神戸)

お申込：メールにて、

①参加日 ②お名前 ③電話番号

をお伝えください。

詳しくは /



学生・研究者の
みなさんへ

TAMBA SASAYAMA
CHIIKIOKOSHI

丹波篠山で 調査・研究 しませんか？

丹波篠山市では、
地元のパートナーとともに
新しい地域研究、
農村の未来を創る仲間を募集します。

【2020年4月～活動する隊員対象】



お申込・お問合せ先

丹波篠山市地域おこし協力隊コーディネーター（眞鍋、橋田、森田）

〒669-2324 兵庫県丹波篠山市東新町4-5 丹波篠山フィールドステーション TEL&FAX 079-506-2366 MAIL chiikokoshi@sasayamalab.jp
<https://chiikokoshi.sasayamalab.jp> Facebook「丹波篠山市地域おこし協力隊」 <https://www.facebook.com/sasayamarangers/>

詳しくは！



神戸農村スタートアッププログラム

農村で、新しいしごと・

未来を創る人のための
プログラム、はじまる。

神戸 農村

2019年 秋
スタート



START UP
PROGRAMME

BE KOBE



United Nations
Educational, Scientific and
Cultural Organization

City of Design
KOBE

Member of the UNESCO
Creative Cities Network
since 2008

kobenoson.jp



“神戸農村”とスタートアップ

神戸と聞いてイメージするのは何でしょう。港・食・異国情緒？

実は神戸では、北と西に少し足を伸ばすと豊かな田園を目にすることができます。神戸で農村？と不思議に思われるかもしれませんが、人口減少、農業や仕事、福祉や教育や交通など、神戸でも問題を抱えています。

そこで考えられたのが、神戸の農村、つまり北区、西区における、新しい事業や仕事の創出を支援するこのスタートアッププログラムです。

ただし、目指しているのは単なる創業ではありません。実は、日本、さらに世界を見渡しても、神戸のように大都市と農村がコンパクトに連なる地域はあまりないのです。そこには新しい時代の都市農村共生の仕組みを生み出す可能性が満ちています。創業だけに留まらず、神戸ならではの農村文化の創造、それが私たちが目指すプログラムです。

創業を通してぜひ一緒に、神戸から新しいライフスタイルを創り出していきましょう。



プログラムの特徴

地と知と志

3つを柱とした学びとワークを組み合わせた実践的なプログラム

農村スタートアップ

ビジネススタートアップでなく、農村スタートアップを考える

現場に直結

そのまま創業に繋がる地域理解とネットワークが得られる

多様な関わり方を推奨

移住・二地域居住、農や食からツーリズム、環境、ITビジネスまで

週末だけで受講できる

月に1回、土日に集中開講。会場は新神戸駅からも近く、遠方からの受講に配慮

実現までサポート

現場に通じたメンター、コーディネーターが創業の実現までサポート

PROGRAMME

プログラムの構成 2019年度の開催期間は、2019年9月～3月までの半年間。
次の3つの領域を学びながら、神戸の農村での創業を目指します。



志と計画を作る Make Mission / Plan

事業を通して目指すものを考え、ビジネスモデルを構築していきます。講師は、経営コンサルタントや投資関係者など。ディスカッションを重ねながら思いやアイデアを形にすることを支援します。



地域と人を知る Know Where / People

神戸の農村(北区、西区)を実際に訪れ、その場所と人々、そして仕事を知ります。講師は、現地で活躍する事業者や農家の方々。現場のネットワークが広がります。



知と行動を知る Know How / Process

食・農・環境ビジネスに関する現場発の理論やノウハウを学びます。講師は、農村ビジネスの先駆者や専門家など。事業家がとった“行動”に注目することにより、実際に事業を進める方法(プロセス)を学びます。

例えば、こんな人を募集しています

新たな事業を
始めたい・開拓したい

農業や食の
ビジネスを始めたい

神戸の農村に
移り住みたい

神戸の農村ネットワーク
(ヒト・モノ・情報)が欲しい

神戸の農村で何が
出来るのか考えてみたい

新しい都市農村共生の
かたちと暮らしをつくりたい

SCHEDULE

スケジュール

原則、月1回の週末集中開講で、土曜日は教室での3コマのセミナー（谷上駅：.me BASE）、日曜日は1日かけての現地ワーク（大沢、淡河、山田、神出の4地区）となっています。年明け1月からは、専門家とともにビジネスプランを形にするワークショップを土曜日に実施し、翌日には、各々の関心・必要に応じて農村部に出向けるようにしております。また、最終日・修了式には、ビジネスプランの発表会を行います。

※プログラムの詳細は、受講確定後に案内いたします。またウェブページも参照ください。

各回の時間 ① 13:00-14:20 ② 14:30-15:50 ③ 16:10-17:30

日付	会場	内容	講師	地域と人を知る	知と行動を知る	志と計画を作る
9/21 土	.me BASE	10:30-12:00 開講式／神戸農村の概要 1 農村ビジネス 2 神戸農村の多様な暮らし 3 ネットワーキング	神戸市 農政設計課 神戸大学大学院農学研究所 / 准教授 神戸市農村定住促進コーディネーター	●	■	□
9/22 日	現地ワーク	● 大沢町(北区) 高山 壽弘 道の駅神戸フルーツフラワーパーク大沢 株式会社北神地域振興 / 専任取締役				
10/19 土	.me BASE	1 ビジネスモデルデザイン 2 思いを伝えるデザイン 3	一般社団法人農西dラボ / 代表理事 株式会社デザインヒーロー / デザイナー			□
10/20 日	現地ワーク	● 淡河町(北区) 吉村 研一 株式会社潤月堂 / 代表取締役				
11/16 土	.me BASE	1 環境・エネルギービジネスを創る 2 生物多様性保全のビジネス化と資金調達 3 IoTと農村の未来	株式会社sonraku / 代表取締役 株式会社バイオーム / 代表取締役 神戸大学大学院システム情報学研究所 / 准教授	●	■	□
11/17 日	現地ワーク	● 山田町(北区) 和田 武大 株式会社デザインヒーロー / デザイナー				
12/14 土	.me BASE	1 交流・加工による農園経営 2 農と福祉のための仕事づくり 3 食ビジネスの新潮流	森果樹園 / マダネ / 代表 株式会社プラスリジョン / 代表取締役 株式会社四国食べる道徳 / 代表取締役	●	■	□
12/15 日	現地ワーク	● 神出町(西区) 西馬 きむ子 有機農家 ヘルシー・ママ・SUN / 代表 大血 一寿 ナチュアリズムファーム				
1/25 土	.me BASE	1 創業ワークショップ① 各自のビジネスプランを形にしています。 2 事業プレゼンの方法 3 個別相談	神戸市 / ITイノベーション専門官			□
2/15 土	.me BASE	1 創業ワークショップ② 各自のビジネスプランをブラッシュアップします。 2 資金調達の方法 3 個別相談	日本政策金融公庫 神戸創業支援センター / 所長			□
3/1 日	.me BASE	1 ビジネスプラン発表会 / 修了式 2 各自のビジネスプランを発表します(希望制)。各種コメントーターが、その後のスタートアップに向けた具体的な助言を行います。最後にプログラムを締めくくる修了式を行います。 3				□

PLATFORM

プラットフォーム 神戸の農村に関係する事業者・農家、大学研究者、定住促進コーディネーター、デザイナーなど、多様なアクターがプラットフォームチームをつくり、みなさんの神戸農村でのスタートアップをサポートします。

ゲスト講師・メンター



福井 佑実子
株式会社アブソリューション
代表取締役



森 知宏
高菜新聞+ツツキ
代表



井筒 耕平
株式会社vonnaku
代表取締役



藤木 庄五郎
株式会社バイオーム
代表取締役



藤井 信忠
神戸大学大学院
システム情報学研究科
准教授



岡田 明徳
一般社団法人関西3Dラボ
代表理事



吉永 隆之
神戸市
E/Aプランニング代表



中塚 博和
日本政策投資公社
神戸創業支援センター代表

コーディネーター（運営スタッフ）



スーパーバイザー
中塚 雅也
神戸大学大学院農学研究科
准教授



プログラムマネージャー
片野 絢子
NPO法人 食と農の研究所



コーディネーター
眞鍋 邦大
株式会社ワークロード
取締役 総務課課長兼本部長

コーディネーター
鶴巻 耕介
つるまき農園
和田 武大
株式会社デザインセロー
西島 陽子
まちづくりオフィス

スタッフ
谷川 智穂
岡山山イノベーションズステーション
事務局員
辻 萌
神戸大学農学博士

地域講師・メンター



西馬 きむ子（神出町）
有機農業
ハルシー・サマ・ラボ
代表



吉村 研一（淡河町）
株式会社美青堂
代表取締役



高山 壽弘（大沢町）
農産物加工・エタワール・ファーム
（FARMA CIRCUS）
株式会社北神地域振興
事務局員



和田 武大（山田町）
株式会社デザインセロー
デザイナー



神戸市農村定住促進
コーディネーター
（西区担当）
大皿 一寿
オチエウリズムファーム



神戸市農村定住促進
コーディネーター
（北区担当）
鶴巻 耕介
つるまき農園

創業を支える拠点施設 創業の「場」として3つの拠点施設と連携しています。※利用は各施設の規定に則ります。



淡河宿本陣跡 神戸市北区淡河町

<https://www.ogo-honjin.com>

神戸市北区淡河町に現存する淡河宿本陣跡。50年近く利用されず、老朽化が進んでいましたが、淡河宿本陣跡保存会や「淡河ワッショイ」といった地域づくりの取組の中で、町内の寄り場や情報発信の拠点として再生されました。北区・西区での創業の足場となる施設です。



.me（ドットミー） 神戸市北区谷上

<https://taniga.me>

.meは、谷上駅（北神急行電鉄・神戸電鉄）に開設されたコワーキングスペース。神戸市北区谷上にて、「挑戦と変化」を生み出すためコミュニティづくり、まちづくりを進める「谷上プロジェクト」の拠点です。今回のセミナーは、この.meに併設されている.me BASE（駅ビル4F）でおこなわれます。



HASE65（ハーゼロコ） 神戸市灘区王子公園

<https://www.kobe-hase65.com>

HASE65は、神戸市灘区、阪急王子公園駅の改札すぐの高架下にある木と緑と農に囲まれる場づくりスペース&素材のショールームです。シェアオフィスとして、食と農の研究所の拠点も置いています。山、里、街をテーマとしたオンラインサロン「山から暮らしへ」も展開中。

2019年度 受講者募集の概要

募集人数 最大20名

応募期間 2019年7月7日(日)～8月31日(土)

応募方法 「神戸農村スタートアッププログラム」
Webサイトのエントリーフォームに必要事項を
記入して申し込みください。

<http://kobenoson.jp>



選抜方法 書類と受講生の多様性に基づき、受講者を選抜させていただきます。
(先着順に随時選考をおこないます。定員を満了し次第募集を終了しますので早めのエントリーをお願いします)

受講料 50,000円 (税込、振込手数料別)
※現地ワークに向かう交通費等は別途必要です。交流会や食事等の費用は含まれておりません。

全 体 スケジュール
7～8月 募集期間(定員を満了し次第終了)
9月2日 受講者最終確定 → 受講料振込
9～3月 プログラム開講(月1回の土日開講を基本)
9月21日 開講式
3月1日 修了式・最終発表会

※詳細はWebページにて確認ください。気象・交通状況等により予定が変更されることもあります。

ABOUT 神戸農村スタートアッププログラムについて

神戸農村スタートアッププログラムは、神戸市の農村地域(北区・西区)での起業や事業づくりに特化した、創業支援プログラムです。

神戸の農村に関係する事業者、農家、大学研究者、移住コーディネーター、デザイナーなど、多様なアクターがプラットフォームチーム(事務局:NPO法人食と農の研究所)をつくり、神戸市(農政部計画課)事業の一環として、活動を進めています。また、神戸大学大学院農学研究科地域連携センターの協力のもと、プログラムの企画を行うとともに、丹波篠山市で行っている「篠山イノベーションズスクール」とも連携しています。

北区の谷上駅(北神急行電鉄・神戸電鉄)に開設された「.me BASE」をメイン教室として、淡河宿本陣跡などを中心に、神戸市内の人と拠点を繋げながら、みなさんの創業を支援していきます。



※駐車場はありません。お車の場合は、近隣のコインパーキングをご利用ください。

セミナー開催場所 .me BASE

〒651-1245
兵庫県神戸市北区
谷上東町1-1 4F

神戸市営地下鉄
「三宮駅」から約10分
「新神戸駅」から約8分

北神急行電鉄・神戸電鉄
「谷上駅」改札出ですぐ

連絡・問い合わせ先

神戸農村スタートアッププログラム事務局
〒657-0838 神戸市灘区王子町1-4-8 HASE65
(NPO法人 食と農の研究所内)

Mail info@kobenoson.jp
WEB <http://kobenoson.jp>

主 催 神戸市
運 営 NPO法人 食と農の研究所
企画協力 神戸大学大学院農学研究科地域連携センター
協 力 一般財団法人 淡河宿本陣跡保存会
COC+ ひょうご神戸プラットフォーム

「食農総合研究所研究成果」一覧

資料番号	課 題 名	報告者（著者）	発表年次
1	和歌山県への移住者の実態と受入協議会の課題	辻和良 植田淳子 藤田武弘	2017. 3
2	地域経営のための合意形成と組織づくり	玉井常貴	2017. 6
3	イノベーションが起こる地域社会創造を目指して ー求められる共創の場づくりー	牧野光朗	2017. 6
4	田辺市龍神村におけるUIターン者・女性活動の現状と課題	小川さだ 竹内雅一	2018. 3
5	神戸大学と篠山市の地域連携活動の展開と課題	橋田薫 竹内聖司 垣内由起子 北山透	2018. 3
6	多角化の視点から考える6次産業化	櫻井清一	2018. 3
7	和歌山県農業展開史	橋本卓爾 大西敏夫 辻和良 湯崎真梨子 杵本敏男	2018. 3
8	園芸産地の振興と人材育成	板橋衛 辻和良	2018. 8
9	農業体験農園の可能性を考える	藤井至 池田信義	2018. 12
10	日高川町ゆめ倶楽部21の体験型観光・移住支援等の取り組みと課題	直川裕子ほか	2019. 3
11	交流・体験型農産物直売所の現状と課題 ー全国JAアンケートおよび現地調査結果をもとにー	辻和良 岸上光克 藤田武弘	2020. 2
12	一般社団法人南紀州交流公社の都市農村交流の取り組みと課題	佐本真志	2020. 2
13	地方創生時代の農産物直売所に求められる機能と新たな運営方式ー交流・体験型直売所の展開を中心にー	岸上光克 櫻井清一 辻和良 植田淳子 藤田武弘	2020. 2
14	和歌山県農業展開史 II	辻和良ほか	2020. 3
15	拠点づくりからの農山村再生 ー田園回帰時代の新たな農村計画論ー	中塚雅也	2020. 6

食農総合研究教育センター研究成果 第15号
2020年6月 発行

著作者

中塚雅也

編集

食農総合研究教育センター

発行所

和歌山大学食農総合研究教育センター
〒640-8510 和歌山県和歌山市栄谷930
TEL. (073)457-7126

印刷所

中和印刷紙器株式会社
〒640-8225 和歌山市久保丁4-53
TEL. (073)431-4411

